
気の利かない物語

案山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気の利かない物語

【Nコード】

N5042Q

【作者名】

案山子

【あらすじ】

人間は生まれ変わる。誰の手を借りることなく生まれ変わる。異世界へと転生を果たした天上瞬は強大な力を有する神代みそぎという女の子と出会う。彼女との出会いは必然であったのか。彼女と行動を共にするうちに、彼は異世界へと転生した理由に近づいていく。

終わりと始まり（前書き）

初投稿です。

終わりと始まり

明けない夜はない。同様に暮れない日もない。僕が何をしようと何を考えようと時間は進む。時間の流れは一定ではないと言われたりもするけれど、実際はどうなのだろう。もし、一定でないのならばできるだけ時間の流れを遅く感じていたい。多くの哲学者が時間とは何かというテーマに基づき、様々な意見を述べている。物理学者においても重要なテーマであるのか、ニュートン力学においては一定だと言われていたりもする。まあ今となつてはそんなことはどうだっていい。僕はもっと長い時間を生きたかった。

「…え」

んっ？何か聞こえる。

これが死の前兆というものなのだろうか。そうだとしたならば、じきに僕の命の灯も消えてしまうということだろうか。

「ねえ」

今度ははっきりと聞こえた。

誰の声だ？この病室には僕だけしかいないはずなのに。

「ねえ。君の名前は？」

名前って言われても、僕の身体はもう動かすことができないのだ。指先1本すら動かせないし、もちろん口も動かせない。

しゃべるなんてできないのにどうやって答えればいいというのだ。

「別にしゃべらなくてもいいよ。頭の中で答えてくれればわかるから」

ああ、もう間違いない。

僕の命は残り少ない。

まるで僕の心が読まれているかのように話が繋がっているじゃないか。笑えてくる、まあ笑うことなんてできないのだけれど。

「あー。信じてないな。もー。こうしてやる」

ちよつ、うそ？これが現実だっていうのか。

ああ、やめてくれ、肩を揺すらないでくれ。

し、信じる、信じるから。

僕の意識が逝ってしまう、本当に逝ってしまう。

かろうじて残っている僕の意識が工場の煙突から空に昇る煙のよ
うに跡形もなく消えてしまう。

「ごめん、ごめん。でも君が私の言っていることを信じないから
いけないんだよ」

はあ、助かった。

この声の主は誰なのかは不明だけれど、これ以上逆らったら僕の寿命があと5分からあと5秒になってしまふ気がするので、僕は声の主の問いかけに答えることにした。

ええと、僕の名前は××だ。

あれ？今、僕の名前に違和感があったのだけれども何故だ。

「やっぱり君だね」

やっぱりとは何のことだ。

「やっぱりというのは、つまり君で正解だったってこと」

それは僕の質問に対する答えとしては適切ではない。なぜならば、まったく意味がわからないからだ。

「ああ、そうだね。今はあまり詳しいことは言えないんだけど、私は転生しようとしている人を探していて、それが君だったってことかな。つまりもう××が君の名前じゃないってこと」

なるほど…って理解できるわけない。

もう意識がとびそうだし、頭を使うようなことはしたくないのに。

「まあ、私は確認したかったただけだから。もう無理しないで寝てもいいよ」

言われなくても、もう無理そうだから遠慮なく寝させてもらっつ。

永遠に覚めることはないのだろうけれど…。

ああ、そういえば結局5分も持たなかったな。

ここはどこだ？身体が動く？でもこの違和感は何だ？

ああ、目が開けられないからか。

「ねえ、起きた？」

この声は僕が死ぬ直前に聞いた声に似ている？というか同じ声だ。

返事をしようと思ったのだけれどしゃべることができない。

「ああ、それは今君が母親のお腹の中に居る胎児だからだよ」

何だと？僕は確か、恐らく酒気帯び運転だろう大型トラックに轢かれてから病院に担ぎ込まれて、医者「手は尽くしました」的なシーンの数時間後に誰に看取られることもなく静かに息をひきとったはず。

「それは間違いないよ。まあ自分の死んだ状況を微妙に詳しく語られても困るんだけど。でも君って誰かを助けたとかじゃなくて無駄に死んだわけね。ぷふっ」

笑うところじゃねえ。

何の罪もない善人が1人死んだっていうのに。

泣いて詫びろ、僕が許すまでとにかく詫びろ。

「ところで君の魂のことなんだけど、記憶を保ったまま転生したら今の状況になっているわけ。」

無視か…。

ん、なるほど…って理解できなくもないな。

「とにかく理解してよ。今から君の記憶を5歳まで消すけどいいよね？」

何故に？急展開過ぎる。

よくないでしょ、僕の大切な記憶だぞ。

「だって嫌でしょ？赤ちゃんの時に前世の記憶があっても身体は思うように動かないし。オムツをつけなくちゃいけないんだよ」

確かにそれは嫌だな。それならば記憶は5歳まで消しておいて貰った方が良いか。3歳くらいでも良さそうな気もするけれど、まあ細かいことは良いだろう。ところでこの声の主はいったい誰なのだ？神様とかであつたりするのだろうか。

「あつ、それ正解。私は一応神だよ。名前はピュタゴラス。輪廻転生とかって習わなかった？」

マジですか！？でもピュタゴラスって男ではないのか？それに彼は輪廻転生から抜け出すために学問、特に数に関する学問を極めよ

うとしたとの話を聞いたことがある。抜けだそうとしていた人が何故に転生の神になっているのだ。

「まあ、それはいいとして記憶をさっさと消しちゃうよ。」

いや、良くないと思うぞって、ちょっと待ってもらえるか？

「んっ？何？」

このような状況の場合って、僕に何か特殊な能力をもらえるとかというラッキーなことはあったりしないのか？

「そんなのあるわけないじゃん」

使えねえ…。

「だって君が勝手に死んで勝手に転生するだけなんだから」

僕の勝手に死んだわけでも転生したわけでもないと思うのだけだ…。まあ、だからと言って誰のせいとも言えないのだ。

「じゃあ記憶消すよ」

ちよつとまつ…。

こうして僕は5歳になるまでは前世の記憶なしで通常の生活を送ることになった。

通常と言えるかはわからないけれど。

蘇る記憶

僕の名前は天上瞬^{てんじょうしゅん}、今日5歳の誕生日を迎える普通の少年だ。僕はこの日を迎える前まではそう思っていた。この日の正午までは。

僕は誕生日を親と共に楽しく過ごしていた。ところが、正午を過ぎてすぐに僕は激しい頭痛におそわれた。

「うつ。ぐつ。」

「どうしたの？瞬？調子が悪いの？」

母親が僕のことを心配してくれている。

でも、たかが頭痛程度で心配してもらうのも悪い気がする。

「えっと、大丈夫だよ。母さん。少し寝不足なだけだよ」

「そう。じゃあ少し横になっていなさい」

「はい」

僕は2階にある自分の部屋に戻ることにした。戻っている最中にも頭痛の痛みはどんどん激しくなってきた。いったい何なのだ。

僕は部屋に辿り着くとそのままベッドに倒れこんだ。その際の振動のせいなのか頭痛がピークを迎えたようだ。僕は歯を食いしばって声を出さないように必死に耐えた。そして僕はそのまま気を失っ

てしまった。

「…ん。瞬。瞬。起きなさい」

「んああー。あれ母さん？」

「もう夕方よ。本当にあなた大丈夫。風邪でもひいたんじゃないの？」

「大丈夫だよ。何か寝たらすっきりしたよ」

「そう。じゃあ、先に下に降りているからね」

母さんの顔からは少し怪訝な様子が見て取れたが、母さんは先の下に降りていった。母さんが部屋を出ていってからすぐに僕の頭の中に異変が起きた。溢れるような知識が僕の頭に入ってきたのだ。まるで僕の頭がサイクロンのように回転しているような勢いで知らない知識が流れ込んでくる。

僕の頭はパンクしてしまったようだ。再び気絶してしまった。

しかし、今度は1分弱で目を覚ました。

ああ、まるでパソコンをリカバリした後に、新しいソフトをインストールしたような感じだった。でもおかげで今はすっきりした気分だ。僕は今まで周りの人とは何かが違うような違和感を持って生きてきた。これではつきりした。僕は全てを思い出したのだ。僕は転生したのだった。だから僕はここにいるのだ。

完全に何もかもを思い出した。僕が1度死んでから転生したこと。

ピュタゴラスと名乗る神に記憶を消されていたこと。何もかも全部だ。

そしてそれと同時に僕は重大な事実に気付いてしまった。

僕は床に頭を叩きつけた。

そうしないとやってられない。

僕は今までとは全く違う世界に転生してしまったのだ。

僕が転生した世界は僕が死ぬ以前に生活していた世界とは全く違う。なぜならば今僕が生きている世界には魔法と呼ばれる科学では説明できないものが存在しているのだ。

「はあ、とんでもない世界に転生してしまった。」

さっきまでのように何も知らなかった方が幸せであつたかもしれない。僕が憂鬱になっているのには原因がある。

魔法が存在する世界ということは通常の世界よりも死にやすい可能性が高い。魔法が存在するのだからもちろん魔獣と呼ばれるものも存在するのだ。さらに僕は魔力を持っていないらしい。まったくもって魔法を使うことができないのだ。つまり一般の人よりも数倍死にやすいということだ。これが鬱にならなくて何になるというのだ。まあ記憶の戻った今考えてみると僕が魔法を使えないのも納得ができるのかもしれない。魔法は精神力も必要としていると聞いたことがある。僕の魂は魔法のない世界のものであるから、こちらの人の精神とは構造というか作りが違うのではないかと思う。でもそ

う考えると僕ってある意味では輪廻転生から抜け出したのではない
か。通常世界から異世界へという感じに。だからピュタゴラスとか
いう神が僕のもとを訪れてきたのか。輪廻転生から抜け出そうとし
ている人間を物珍しさで見に来たというところだろう。まるで冷や
かしではないか。今度あつたら何か罵倒してやろう。そう決意した
後、僕は親のいる1階へ降りていき、再び誕生日のお祝いをしたの
だった。もちろん思考が5歳時らしからぬようにならないよう気を
つけながら。

「はあ。今日は疲れた」

僕は今風呂から出た後に寝るために自分のベッドで横になってい
る。しかし、まったくもって眠ることができない。頭の中を整理し
ないと寝たくても寝ることはできないだろう。僕が何故この世界に
転生したのかはわからないので、まずは今後のことを考えなくては
ならないだろう。この世界で生きていくにはやはり強くならなくて
はならない。僕が住んでいるこの街は比較的安全ではあるが、魔獣
が襲ってくることはないとは言い切れない。魔法が使えないのなら
身体や武術を鍛えるしかないだろう。明日からは少し鍛錬をするこ
とにしよう。そんなことを考えていたらまだ5歳児の身体である僕
はいつのまにか寝てしまったようだ。

「やっと寝たんだね」

あれ？この声は確か。

「そう私だよ」

「私だよ」じゃねえよ。

「あー。えーとピユタ何とかさんか」

「ひどっ！もう、ピユタゴラスだよ。呼びづらいならピユタちゃん
って呼んでもいいよ」

誰が呼ぶか。ちゃん付けとかお前の容姿を見てみたいぜ。

「はいはい。で何の用。ピユタゴラスさん」

「呼んでくれないんだ。何か扱いがひどくなってる？それに君っ
てそんなんじゃ絶対に5歳にはみえないよ」

「うるさい。黙れ」

「さらにひどくなっている」

「で何の用だ。訳もなく僕の夢の中に出てきたわけじゃないだろ」

「夢って気づいてたんだ」

「お前が「やっ」と寝たんだ」とか言っただろうが。さっさと用件を
言ってくれ」

「わかったよ。今日は記憶の戻った君の様子を見に来たんだ。それ
に私に聞きたいことがあるんじゃないかと思って」

確かに聞きたいことは腐るほどある気がする。何といってもわか
らないことだらけの状況でもあるのだ。

「怒鳴って悪かったな。わざわざ心配してくれてありがとう。それ

で聞きたいことがあるのだが聞いてもいいか？」

「うん。そのために来たんだから何でも聞いてよ」

「じゃあまず何故僕は这个世界に転生したんだ？」

「ごめん。それはわからない」

使えねえー。「何でも聞いて」と言っておきながら1番重要なことがわからないのかよ。

「じゃあ、何故僕は魔法が使えないんだ？」

「あー、それならわかるよ。君の魂はもともと这个世界に存在しなかったものだから、この世界の魔法には適応してないんだよ」

つまり、僕の予想とほとんど同じだということか。

「でも何で僕は这个世界に転生したんだよ。这个世界に魔法が使えない人なんていないというのに、僕って不利すぎるじゃないか」

「君は気付いていないのかもしれないけど君にも力はあるよ。何て言えばいいのかな。君の居た世界で精神を統一して1点に集めるような力のことなんだけど」

「それって気とかつて感じのやつか？」

「そうそう。それ。这个世界だとその気が身体に与える影響がとても大きくなっているから君もいろんなことができるはずだよ」

「いろんなことって何だよ？」

「例えばその気を拳に集めれば殴る力とか防御力も上がるし、怪我した部位に集めれば細胞が活性化して集めた気の量に比例して傷も治せるはずだよ」

何！？それってなかなか使えるな。でも魔法と比較したら攻撃力はかなり劣るな。防御力に関しては使えるとして傷が癒えるのは最高だ。筋力を鍛えればなかなかやっていけそうな気になってきたな。

「ちなみに僕はその気っていつのをどのくらいの量もっているのかわかるか」

「うーん。量はけっこうあると思うけど私にはこの世界の基準がわからないから何とも言えないよ。でも気も魔力も神力もこの世界で測定する際には区別がないみたいだから測定してみたら良いんじゃない？」

なるほど。ということは魔力測定を行えば僕も一応、魔力ありと認識されるわけか。

「ところで神力って何だよ？」

「神力って言うのは魔力や気が体内のエネルギーを使用しているのに対して自然のエネルギーを使用するんだよ。自然界の力だから災害レベルの力も持っているんだよ」

何だ。その反則的な力は。

「その神力は誰が持っているんだ？」

「この世界では神力を持つている人のことを精霊の生まれ変わりと
して精霊人と呼ばれているみたいだよ。でも人にとって神力は毒で
もあるから、中和する必要があるらしいよ。その中和の役割をする
のが魔力、恐らく気もそうだと思うけど。だから精霊人は二十歳前
には魔力が気を持つ人と契約して定期的に魔力や気を送りこんでも
らわなくてはいけないんだって」

まあ、強い力には危険がつきものだってことか。

「契約ってどうゆうふうにするんだ？」

「確かペアとして作られたアクセサリがあると思うんだけど、それ
をつければいいはずだよ」

「でもその神力をもった精霊人だけ？この世界にはどのくらい居
るんだ？」

「すごく少ないはずだよ。精霊人は全人口の約0・1％で感じかな
0・1％？つまり1000人に1人ってことか。まあ確かに少な
いな。これだけ少ないとかなり重宝されそうだな。この世界ではあ
る程度の力がないと生きていけなさそうだし。」

「ありがとな。だいぶ参考になったよ。僕がこの世界に転生した理
由もわからないし、何かをやらなくてはいけないというわけでもな
いみたいだから僕は僕なりにこの世界で生きてみるよ」

「そう。頑張ってね。この世界の魔法だって火と水と風と雷だけだ
から君の気だっって対抗はできると思うよ」

そういつてピュタゴラスは僕の夢の中から消えていった。僕はその後、毎日身体を鍛えて素手での格闘と刀などの扱い、すなわち剣道などの鍛錬を行うようになった。そして次の物語は僕が10歳になったところから始まる。

10歳の少女 上

「母さん。僕に魔法のことを教えてくれない」

「あんた魔法は使えないからあきらめたんじゃないの？」

母さんは台所で調理をしながら僕の顔を見もせずに答えた。

「使えないんだけど僕は知りたいんだよ」

「まああんたが自暴自棄にならないならいいけど」

いくら母親でもム力つく言い方だな。もし僕に気という力がなかったらキレてしまっていたところだろう。危なかった。

「ならないから教えてよ」

母さんは僕の顔をじつと見つめ、「ふー」とため息をつき、調理の手を止めてから僕の座るテーブルの前に座った。

「わかったわ。教えてあげる。魔法というのは火、水、風、雷の4種類がある。この4属性は四聖獣からきたと言われているわ。火の朱雀、水の玄武、風の青龍、雷の白虎と言った感じに。それぞれの属性の相性は自然界の法則と一緒にだから説明は割愛するわね。何か他に聞きたいことはある？」

「神力について聞きたいんだけど」

「神力？」

母さんは僕の言った神力という単語に対して少し驚いた顔を見せた。

「そう、神力。魔力のほかに神力という力もあるって聞いたのだけれど」

「良くそんな言葉知ってたわね。魔力とは違った力で謎が多いわ。わかっているのは人にとっては有毒であり、魔力で中和可能ということ。神力を持った人、精霊人というのだけど、精霊人は月に1回ほど神力により寝込む日があるらしく、二十歳までに契約者、つまり専属の中和役を決めないと死ぬ危険性もある。神力を使えば自然災害なみの魔法を使うことができるってところかな」

ピュタゴラスの言っていたこととほとんど同じだな。

「ありがとう。勉強になったよ」

僕は母親にお礼を言ってから家の外に出た。その際に「あんまり遅くなるんじゃないわよ」と言われたが、まあ5時くらいには帰ってくるつもりであったから返事はしなかった。僕が何故母親にこんなことを聞いていたのかは…何故だろう。興味本意？まあそれはいいとして。

「着いた」

ここは僕のお気に入りの場所だ。丘の上に大きな木が1本たっている。この木の根本に座って考え事すると良い感じに頭が働いている気がするのだ。あくまで気がするだけなのだけれど。

僕がくつろいでいると、僕と同年くらいの子がフラフラとした足取りで歩いてきた。さらっとしたきれいな髪が特徴的だ。ここは丘の上であるし、登ってくるのに疲れたのだろうか。

何かがおかしい。今にも倒れそうではないか。僕は仕様がなく、手を貸すために女の子の元まで行くことにした。

「えーと、君、大丈夫？」

僕は手を差し出しながら彼女に声をかけた。

「…で」

何かぼそつと聞こえたが、かなり小さな声であつたので何と言ったのかは聞き取ることができなかった。下を向く彼女の顔にはだいぶ汗がみえる。顔色も良くない。

「何？」

「私に関わらないで」

女の子は顔をあげると同時にいきなり怒鳴りだした。もちろん僕はビビってしまった。

だってしょうがないだろ。いきなり大声で拒絶されたんだ。誰だっけビビるだろうよ。絶対に僕だけじゃないはずだ。

「えーと、ごめん」

僕は咄嗟に支えてあげようとして出した手を引っ込めた。女の子

はそのまま僕のお気に入りの木の根元まで行くと木にもたれかかるように座り、眠ってしまった。

ああ、どうしよう。不用心すぎるだろうが。

この子を放って帰っても良いのだろうが、僕と変わらないくらいの女の子を一人にするのは良くないと思う。体調が悪そうだったし。

ああ、どうしよう。仕様がな。彼女の体調が少しでも良くなるまで精神統一でもして待つことにしよう。

僕が精神統一を終えると日が傾いてきていた。だいたい午後の5時くらいだろうか。彼女はかれこれ4時間くらい木にもたれかかって寝ているようだ。まあ僕も4時間くらいの間、精神統一をしていたことになるのだけれど。そんなことを考えていると彼女の身体が動いた。やっと起きたようだ。

「やっと起きたみたいだね。体調は大丈夫？」

「あんた誰よ。こっちにこないで」

彼女はそういつて立ち上がると、咄嗟に僕から離れる。

「僕は…って危ない」

「きゃっ」

彼女は後ずさりを続けたため丘の端の崖の方まで行ってしまい、危ないと気付いた時にはそのまま足を踏み外して落ちてしまった。何故だろう。僕の身体は勝手に動き、彼女とともに崖から落ちるは

めに。もうこうなったら彼女をかばった方がかつこいいだろう。僕は彼女を抱きかかえたまま落下した。

この高さはやばい。このまま落ちたら助かる可能性は低そうだな。彼女だけでも助けられないとな。

えっ？何だ？

抱きかかえている彼女が無意識なのか地面に向かって手をかざした。

「うわっ」

急に地面に向かって衝撃波のようなものが放たれ、地面の木々はなぎ倒され更地と化した。僕ははっとして彼女を庇うようにして背中から地面に叩きつけられた。

「ぐはっ」

背中から落ちたために肺の空気がいつきに吐き出された。呼吸ができない。苦しい。気を背中に集めていたことと衝撃波による落下スピードの減速により何とか一命は取り留めたようだ。しかし木の枝や岩肌などで切ったのだろうか身体は傷だらけだ。かなり大きく開いた傷もある。

女の子は？と抱きかかえた彼女を見ると脇腹に大きな切り傷がある。意識はないようだが生きている。僕は気の力が細胞を活性にさせ傷を癒す力を持つことを思い出し、服の袖を破って血止めに使い、彼女の脇腹に気を流し込む。その間も僕の身体の傷からは血が流れ続けているが。

ああ、視界がぼやけてきた。血を流しすぎたか。でも何とか彼女の傷はある程度ふさぐことができたみたいだ。でも傷痕は残ってしまった。僕はそのことを考えながら意識を飛ばしてしまった。

「…てよ」

「ん。ぐっ」

「起きてよ」

仰向けに寝た僕の顔を覗き込むようにして女の子が泣いていた。

「良かった。わぁあん」

女の子は安心したのか声を出して泣いてしまった。僕はその間に自分の怪我の状況を確かめる。気の力の影響なのか、ほとんどの傷からもう血は流れていないようだ。僕は女の子へと視線を戻し、ハンカチを持っていたことを思い出して女の子に渡してあげる。少し血が染み込んでしまっていたみたいではあったが、女の子は素直に受け取ってくれた。

辺りを見回すとだいぶ暗くなってしまうっているようだ。

これは母さんに怒られるな。

そんなことを考えていたら女の子が泣きやんだのか、話しかけてきた。

「もう大丈夫なの？私が起きるとあなたが血まみれで倒れていたか

ら私…」

「もう大丈夫だよ。君こそ大丈夫？脇腹の傷は痛まない？落ちる前にも体調が悪そうだったし」

「脇腹の傷？」

彼女は傷に気付いていなかったようで、自分の脇腹を見て驚いた表情を見せた。

傷があることにすら気づいていなかった程であるから、痛みはなのだろう。まあ良かった。しかし、傷痕は残りそうだ。やはり女の子であるから申し訳ない気持ちになる。

「あれ？何で私の体調まで良くなってるの」

ん？どういうことだ？彼女がふと気づいたようにそう発言した。体調が良くなった？

「えーと、何でもなし。ところであなたの名前は？」

彼女はごまかすかのように名前を尋ねてきた。まあ詮索するほどのことでもないようだから、僕は気にせず、話を続けることにした。そういえば自己紹介とかしていなかったな。

「僕の名前は天上瞬。君は？」

「私はみそぎ。神代みそぎ」

「みそぎちゃんね。よろしく。まあ自己紹介はいいとしてこれから

どうするかだよ。君はどこに住んでいるの？」

「えーと、西中町」

「西中町？それって隣町じゃん！」

ここが北目町だから西中町に行くにはだいぶ時間がかかるし、夜は魔物が活発化するから町と町を繋ぐ街道の途中で魔物に出くわす危険がかなり高い。

はあ、どうしよう。僕の家に来ていくしかないか。

「えーと瞬くん。ここって北目町なの？」

みそぎちゃんは不安そうな顔で僕の顔を覗き込んできた。少しドツキリしてしまったのは秘密だ。

「そうだよ。でも何でわざわざ隣町まで？歩いたら2時間くらいかかるよね」

「いつ、いじめられたの！泣いて歩いてたら道がわからなくなったの。悪い！」

みそぎちゃんは顔を真っ赤にして答えた。

「悪くはないけど、どうしていじめなんか？」

「私が普通の人と違うから…私は普通じゃないの」

「どこが？」

みそぎちゃんもじもじしながら答えた。

「わっ、私は魔法がうまく使えないの！魔法を使おうとすると暴発して家を壊しちゃったりするし」

なるほど、あの威力だからな。この世界でも僕の世界同様でいじめはやはり存在するものなのか。

「そんなことか。僕なんて魔法が全く使えないんだから、僕の方がいじめられそうだね」

「使えないの？ホントに？」

みそぎちゃんは全く信じていないようで僕に詰め寄ってきた。

そんなに近寄られると焦るじゃないか。まったく。

「本当に」

自分で言っていて少し恥ずかしくなる。

「ぷふっ、ふふふ」

急にみそぎちゃんはお腹をかかえて笑い出した。

「笑うなよ。しょうがないだろ。使えないものは使えないんだから」

「だって、お母さんからこの世界に魔法を使えない人はいないって教えてもらったから」

「まあ確かに僕だけだろうね。威力は別として種火程度も作れないのは僕だけだろうね」

「私よりもダメな人が居たなんて何かうれしいな」

ちよつとその言い方は傷つくな。

この世界じゃあ魔法に関して僕以上の落ちこぼれは居ないと自負しているけれど、ダメな人って何だよ。

まあ、いいか。

「とにかく今日は僕の家招待するよ。隣町じゃあ帰れないからね」

「いいの？」

「いいよ。明日、君の家まで送ってあげるよ」

僕らは恐らく夜の9時くらいであろう時間にようやく家に辿り着いたのであったが、僕を待っていたのはもちろん母親の雷だった。ここで言及しておきたいことがあるのだけれど、雷と言うのは断じて怒りの表現ではない。そのまんまの雷だ。僕の母親は雷の属性の魔法を使うのだ。僕は黒焦げになって1時間くらい玄関前に放置された。僕が意識を取り戻してリビングに行ってみると母さんとみそぎちゃんが仲良さそうに話をしていた。僕が黒焦げで倒れている間にみそぎちゃんの事情などはすでに説明されていたようだ。まあ僕としては遅くなった事情説明が不要で助かるけれど、雷を落とされる前に事情を聴いてもらえている方がどんなに良かったのか。そんなことを考えていると急に母親が僕の方に視線を移した。

「瞬。明日ちゃんとみそぎちゃんを家まで送り届けるのよ」

「言われなくてもわかっているよ」

本当にわかっている。もちろん言われなくても。僕がやらないと母さんの雷をくらうことになるだろうことも。

まあそんなこんなでみそぎちゃんは僕の家泊ることになった。何故か寝るのは僕のベッドで。そして僕はリビングのソファ……なんてシヤレた物はなかったから座布団を3つ繋げてリビングで寝るのだった。

10歳の少年少女 下

身体が痛い。いつものベッドのふかふか感に慣れ過ぎてしまったためか、僕の眠りはかなり浅いものだった。朝日が差し込むと同時に起きてしまったかのような気がする。

えーと、時間はつと、5時だった。僕って起きるの早つ。まだ10歳児なのにこんなに早く1人で起きられるなんて凄いな。きつと将来大物になることができるだろう。あつ、でも社長出勤ができない。致命的なことに気づいてしまった。

でもこんな眠りの浅かった僕が2度寝をしないはずがない。

結局、8時になったと同時に母親のチョップで叩き起こされることになったわけである。

「あんた今日はみそぎちゃんを西中町のお家まで送るんでしょ。しやきつとしなさい。ほら、みそぎちゃんを見習いなさい。もう起きて朝ごはん食べているわよ」

「わかっているよ。」

僕だつてベッドで眠れていたならば8時に朝ごはんを食べるくらい余裕だ。ついでに朝シャンできるくらい余裕だつて言うのに。

そんなこんなでとうとう出発のお時間だ。現在時刻は午前10時、絶好の出発日よりである。

「そんなところでボーっと立っていないで出発するよ」

ボーっと立っていたわけではない。僕は心を固めていたのだ。

足を見てみる。武者ぶるいだってしてるんだぜ。

「早くー」

「わかったよ」

みそぎちゃんが口を尖らせながらせかすので僕は後をついて行く。

もうちょっとくらい心の準備をさせてくれたって良いじゃないか。僕なんかこの町を出るの初めてなのに。

「ところでみそぎちゃん。君っていじめられたことが悔しくて逃げ出したらいつの間にか隣町まで来てたって感じなんだっけ」

だっけっていうのはおかしい気もするが、ちょっと聞きづらいことではあるから、まあベストな聞き方な気がする。

「そうよ。悪い」

「別に悪いなんて言ってないよ。ただ良くそんな遠くまで気がつかなかったもんだなあと思って」

「瞬くん。私のこと馬鹿にしてるでしょ。絶対そう。あーすっかり私の魔法が暴発して瞬くんをボコボコにしちゃうかも」

「絶対にうつかりじゃないじゃん。故意的にじゃん」

「事後的に」

「すでに僕はボコボコ？」

「本当にそうしてほしい？」

みそぎちゃんは不敵な笑みを浮かべながら僕に迫ってくる。本当に僕の身に危険が迫っているような気がしたので話を変えることした。

「えーと、みそぎちゃんの笑顔はやっぱり最高だね。こんなかわいらしい笑顔は僕の人生で初めてだよ」

僕は話を変えようと思ったのだけれど、何も話題が思いつかなかった。その場しのぎではあるが誉める作戦に出た。誉めてみたのは良いのだが、みそぎちゃんはお気に召していないようで瞬く間に顔が真っ赤に染まっていく。

絶対に怒っている。みそぎちゃんの顔が沸騰しているようだ。ああ、作戦失敗だ。崖下の木々のようになぎ倒された僕の姿が容易に想像できる。僕は防御の姿勢をとった。

ところがいつまでたってもみそぎちゃんから魔法が放たれる気配がない。防御の姿勢をとった腕の隙間からみそぎちゃんの様子をそーと伺ってみると固まってしまっているようだ。

どういうことだ？

まあ、結果オーライか。僕は何とか危険を回避することができたようだ。でもこの固まっているみそぎちゃんはどうしよう。とりあ

えず正気に戻ってもらわないと進むことができなくなってしまう。
僕は意を決してみそぎちゃんの肩を揺する。

「おい。みそぎちゃん。戻ってきてくれ。」

「ひゃつ。」

みそぎちゃんは正気に戻ると同時にいきなり叫び声をあげた。

ちよつと、これじゃあまるで僕がみそぎちゃんを襲っているみたいじゃないか。急に叫ばないでくれよ。辺りを見回しちゃったじゃないか。まあ誰も居なかったけれど。

「何してるのよ！」

凄みを利かせてみそぎちゃんが僕に言うてくるので僕は少し後ずさりしながら弁明。

「何ってみそぎちゃんがトリップしてたから正気に戻してあげたんじゃないか」

「そつそつ、ならいいけど」

いったい僕が何をしていると思ったんだよ。自分で言うのも何だけれど、僕はチキンなんだ。そんな僕が変なことをするわけじゃないじゃないか。

「へえー、チキン野郎なんだね」

何！？僕の心が読まれた？お前はピユタなんかか。

「違うわよ。ほら、また。瞬くんが声にだしていたんじゃない。で、ピユタなんとかって？」

何だつて？僕としたことがやってしまった。これも全部ピユタゴラスのせいだ。お前が僕の心を読むなんてことができるからいけないんだ。そのせいで僕は口に出すのと心の中で思うことの区別がつきにくくなったんだ。

「何でもない……。ところでもう結構歩いたよね。そろそろ西中町が見えてくるんじゃないか」

「ホントに？やっと戻って来れたんだ」

本当にうれしそうな顔で言っている。やはりまだ10歳の女の子であるし、親に会えない寂しさはあったのであろう。

「あつ、見えてきたんじゃないか」

あれが西中町か。さほど北目町と変わらないな。まあここは田舎だからそんなに変わるわけないか。

「本当だ」

僕らはようやく西中町にたどりついた。現在時刻は12時。やはり2時間くらいの時間を要してしまった。途中に魔物に会う危険が0%ではなかったが、結局見かけることすらなかった。まあ魔物って基本は夜行性らしいから当たり前か。

「みそぎちゃんの家ってどこ？」

「えっ。……よ」

「……?」

マジですか。みそぎちゃんが指差す先には何もないとかじゃなくて、とてつもなく立派な豪邸がある。

ウソだろ。みそぎちゃんの家って金持ちなのか。まあ確かに着ている服はかなり質のよさそうな物な気がする。僕ってば気づくの遅いだろ。もっと早く気付いておくべきだった。死ぬ前の世界でも僕はそんなにお金のある家ではなかったから、あまり礼儀作法とか詳しくないぞ。どうするか。

「何ボーとしているのよ。入って」

彼女は僕の気持なんか知らずに僕を引っ張ってくる。

「えーと、家に戻れて良かったね。僕はこのまま帰るよ」

僕はそう言っただけを返そうとしたが、みそぎちゃんが僕の服の袖を離してくれない。

「何言ってるのよ。ただいま」

みそぎちゃんはそう言っただけで玄関の扉を開けてしまった。もう後戻りはできそうにない。

「あら、みそぎ。心配したのよ。あなたが帰って来ないからお父さんと二人でずっと探していたんだから。今から町の人にも協力して

もらおうかと思っていたのよ」

扉の中からきれいな女性が現れた。会話の内容からして母親なのだろう。それにしても美人だな。みそぎちゃんも大きくなったら彼女のような女性になるのだろうか。

「ごめんなさい。ちょっと道に迷っちゃって」

「まあ帰ってきてくれたからいいわ。んっ、ところで隣の男の子はどなた？」

急に僕の方にみそぎちゃんの母親の視線が注がれる。

「あ、えーと、僕は天上瞬で言います。みそぎちゃんが隣町」

「ああー彼は私が道に迷っていたときに助けてくれたのよ」

僕が必死にしゃべっていたというのにいそぎちゃんが急に声をかぶせて僕の声さえぎった。

「そうなの。ありがとう。もうお昼だしご飯食べて行ってね」

そう言ってみそぎちゃんの母親は家の中に入って行った。

「何故に急に遮ったんだよ」

「だって恥ずかしいじゃない。迷子になって隣町にまで行ったなんて」

そんなこと別に恥ずかしがることじゃないじゃないか。事実なん

だから。僕が緊張しながらも必死でしゃべっていたというのに。

僕とみそぎちゃんはその後、みそぎちゃんの母親のとてもおいしい料理を食べた。僕の母親の料理よりも100万倍おいしかった。その後、みそぎちゃんの母親と昨日の話をし、結局みそぎちゃんがぼろを出して、せつかく隠した隣町まで迷子になったという真実がばれて、何故が僕がみそぎちゃんい怒鳴られるという事件があり、僕は遅くなると魔物が出るということで午後の3時に帰ることになった。

「じゃあ僕は帰ります」

「本当にありがとう。みそぎをここまで送り届けてくれて。気をつけて帰ってね」

みそぎちゃんの母親はとても優しい雰囲気僕を送り出してくれた。その間、みそぎちゃんは何もしゃべらなかった。僕はそのまま頭を下げた後後ろを向いて歩きだした。

「うわっ」

僕が歩いているといきなり腕が引つ張られた。少し転びそうになっってしまった。まあ転ばなかったけれど。後ろを見てみるとみそぎちゃんが僕の左腕を掴んでいた。

「どうしたの？みそぎちゃん」

「これ持ってて。絶対にはずしちゃう駄目だからね」

そう言ってみそぎちゃんは僕の腕にブレスレットを嵌めた。その

間、みそぎちゃんは顔を上げることがなかったためどのような顔をしていたのかは僕にはわからない。その後、みそぎちゃんは振り返ることなく家に戻って行ってしまった。

僕は帰り道は走って帰ることにした。まあこれもトレーニングだ。走りながらさっきのことを考える。みそぎちゃんの家でご飯を頂いている際に聞いたのだが、みそぎちゃんの家はもうすぐ引越すらしい。何でも父親の仕事の関係で都心の方に行かなくてはならないとのことだ。みそぎちゃんからもらったブレスレットはあまり派手な物ではなくシルバーの普通のブレスレットという感じだった。

その後、僕は午後4時くらいに北目町の家にとどり着いた。走れば1時間くらいで辿り着けるらしい。道も一本道だから迷わないし。そう考えるとみそぎちゃんはどうかやって迷子になったのだろうか。

そんなこんなで僕の10歳の物語は終わる。

進学という名の旅立ち

「しっかり準備は済ませておきなさいよ。忘れものなんかしても知らないからね」

母さんが階段の下から僕に注意を促した。

「わかってるよ。もう準備は終わったから」

僕はそう言っただけで荷造りを始めていた。「終わった」とか言っておきながら何も終わっていないのだけれど。まあ今始めたばかりだし。

僕がこんな微妙な嘘をついたのには訳がある。とてもくだらない、でも僕にとつてとても深刻な理由が。もし、僕がここで「あつ、忘れてた」なんて発言をしていたならば、きっと僕は明日の朝までしびれて気絶していたことだろう。僕の咄嗟の機転によって僕は明日の朝に荷造りが終わっていないことに気づいて焦り、結局電車に乗り遅れてしまうという元も子もない状況にならず、荷造りに勤しむことができているのだ。まあ言われる前に終わらせておけて話なんだろうけれど。

ここで、僕が現在置かれている状況を荷造りを行いながら説明しようと思う。

僕は現在15歳である。普通の世界では高校に進学する年齢だ。こちらの世界でも高校と似たような学校がある。しかし、大学に類似したものがないので、次に通う学校が最終学歴だ。僕は都心の学校に行くことになったため荷造りをしている。もちろんこの田舎にも遠くには学校はあるが、様々な理由により都心の学校へ行くこと

となった。今からその様々な理由も説明しよう。

まずこちらの学校も受験方式であることは言っておかなければならない。その際の方法だが、この世界では受験の年になった際に皆、魔力量測定を行わなければならないと決められている。そしてその計測された数値により、受験できる学校が決まるのだ。基本的にその数値で合否も決まるので受験できれば受かると言っても過言ではないだろう。僕も同様に計測を行ったわけだが、ピュタゴラスが言っていた通りに気も魔力として計測は行われたようで0という結果にはならなかった。それどころかなり良い結果をたたき出してしまった。この世界での平均が100であるのだが、僕は280という数値であった。もっとも有名な都心の学校でも250が受験可能数値となっているため、僕はどこの学校でも受けられるということが判明した。そして母さんがこの結果を見て、すぐにその都心の学校に願書を出してしまったのだ。魔法を使えないと思っていた息子の思いもよらない良い結果に調子に乗ってしまったということもあるのだろうが、この学校は国の援助で運営されているため授業料が無料であるということもあったのかもしれない。

言っていないかったかもしれないが、僕の家は母子家庭なのであまりお金に余裕はないのだ。まあ僕も反対する理由も無かったし、家計のことを考えたら良かったのかもしれないと思っている。ちなみに僕の父親は僕が物心つく前に病気で死んでしまったらしいので顔はわからない。この世界に写真なんてないし。

まあこんな感じだ。

僕の母さんの話なのだけれど、母さんは雷の属性を活かして発電関係の仕事をしている。この世界には魔法の力を溜めることのできる鉱物が存在する。最初は僕も何か仕掛けがあるのかと思ったけれ

ど、違ったようだ。火属性の人が鉱物に力を注げば鉱物は使い捨てカイロのように熱を発することができるが、鉄の酸化反応は利用している形跡はなかった。雷属性の人が力を注いだ鉱物は電池のようなものになるが、何度でも充電可能だし、携帯などに使われているリチウム電池とは似ても似つかない。

まあ不思議世界であるからしょうがない。僕は考えてもわからないと思うたら、もう考えない性質なので気にしないことにしている。

「お久しぶり。10年ぶりくらいかな」

ん？この声は。

「ピュタゴラスか。何か用なのか。僕は荷造りに忙しいのだけれど」

僕は不機嫌さマックスで答えた。まあしょうがないだろう。なかなか荷造りが終わらなくてイライラしていたところだったのだ。

「うーん。暇つぶし。ちょうど重要な案件が片付いたところだから」

「お前働いていたのか！僕はてっきりニートなのかと思っていたのだけれど」

「ひどいなー。私だって神なんだから働いてるってば」

「ふーん。まあちょうど黙々と作業をこなすのにも飽きてきていたところで、話し相手が欲しかったところだから良いが。そういえば聞きたいことがあるのだけれど、僕って転生した際に何故記憶が残っていたんだ」

前々からけっこう疑問に思っていたんだ。普通前世の記憶なんかは残っていないはずであるのに、僕だけ前世の記憶が残っているのか。

「あー、それはね。君が元居た世界では死んだあとすぐに記憶がなくなるわけじゃなくて、生まれ変わる直前で記憶がリセットされるのに対して、この世界では死ぬとすぐに記憶がリセットされるからだよ」

「えーと、つまりどういうこと？イマイチよくわかんらない」

「つまり、君が元居た世界では幽霊とかって話があったでしょ？幽霊っていうのは死んだ後の魂だけの存在って訳。ここまではいい？」

「ああ。まあ幽霊がいたとしてだが」

「いるの。君は一度死んで魂だけの存在となって転生を待つ身となった訳なんだけど、ここで君は何故か異世界に来てしまった訳。君が来たこの世界では死んだあとすぐに記憶をリセットする仕組みだから、君の魂はリセットを受けずにこの世界で生まれ変わったというわけ」

「はーん、なるほど。僕ってうまい具合に記憶のリセットを免れてしまったのか」

「そういうこと。まあだから誰かが意図的に君の記憶を残したわけじゃないんだよ」

ふーん。でもそれって本当に僕が勝手に異世界に転生しただけってことなのか。僕は誰かが何かしらの目的があって僕を記憶を保つ

たままの状態でこの世界に転生させたと思っていたのに。本当に理由もなく僕はこの世界に転生してしまったのか。あつ、でも僕以外にも異世界に転生したことがある人っているのではないか。聞いてみるか。

「少し話が変わるのだけれど、過去に僕以外にもこの世界に転生してしまった人いるのだよな？」

「へっ？そんな変な人は君だけだよ」

「別に変ではない。僕は普通だ」

「君が普通なら、スカートめくりしてる男の子は普通すぎるくらい普通だよ」

「普通だろ。それ」

「肯定された」

何を言っているのだ、このバカ神は。スカートつてめくられるために作られたんでしょ。違うの？めくられないスカートなんてスカートではない。そんなものはただのサイズが大きい服の裾だ。それはそれでそそられるけれど。おつといけない話がそれってしまった。

「まあとにかくだ。僕はただ巻き込まれただけなんだ。きっと……。きつとそうだ。僕は信じている。信じる神なんてものはいないけれど」

「ちよつと、いるじゃん。目の前に」

「へっ。どこに？僕の目の前には何も見えないが」

「ひどっ。私っていったい」

「いやあ、実際、何も見えないし」

僕は決して目を瞑っているわけではない。僕はピュタゴラスの姿見たことないし、声だけしか知らない。

「そうだったー。君には私の姿が見えていないのだった…」

お前、本当にバカだな。

んっ？ちよつと待てよ。こいつが現れるときって僕が寝ている時とかだったよな。

「おい。今って僕は寝ているのか？」

「……………」

「返事をしろ。そんなにショックを受けることではないだろうが。重要なことなんだ」

「はっ。えーと、そうだよ。私が君の夢の中に干渉してるの」

ちよっ、嘘だろ。僕いつ寝たんだよ。

まあ今はそんなことは良い。過去よりも今だ。

「おい。今何時だ？」

「えーと、朝の7時…くらいかな」

何！？もう朝になっているだと。って、驚いている場合じゃない。

「今すぐ起こせ。僕を1秒でも早く起こせ」

この後、僕は必死に荷造りを行い、9時発の電車に駆け込み乗車で何とか乗り込むことができたわけだが、母さんの雷を帯電した影響が髪が爆発した状態で乗り込んだ僕の姿は周りの乗客には笑いの種であつたらしい。

くすくすと笑うんじゃない。笑うなら堂々と笑いやがれ。

上京

「やっと着いたか」

僕こと天上瞬はようやく僕が通うこととなった学校に到着した。電車という乗り物は素晴らしい。歩くのとは天と地の差だ。歩いたら1日かかるであろう道のりを3時間ほどまでに短縮することができるのだから。

この世界の電車は電気自動車という感じで、元居た世界の電車のイメージとは違う。電力は魔法によって無限といっても良いくらいだからとても快適に走っている。モーターの仕組みを利用した電車はゴムの木から採取した樹液を天日干しし、作られるゴムをタイヤに使用している。硫黄を混ぜると物性が上がることを利用して頑丈なタイヤが作られているのもポイントだ。

まあ、こんな世間話はどうだって良い。今重要なのは僕が今からどこに行けば良いかってことだ。

えーと、こういう時は学校案内とかを読めば書いてあるはずだ。と…家に忘れた。くそつ、僕としたことが、新しく通う学校の案内書を持つて来るのを忘れるなんて。何たる屈辱。

あつ、でもこういう時は校内に案内所みたいなものがあつたりするのではないか。まあ職員室とかに行つて聞いてもいいのだけれど。

んっ？校門が開かない。ここって実は入口ではないのか。ははは、そうか。フェイントか。さっそく新入生いびりとはやってくれる。

僕はその後、入口を探して1時間ほど校舎を囲う柵を調べたが、最初に開かなかった校門以外に入口らしきものはなかった。

「今日って入学式ではないのか」

僕は咄嗟に辺りを見回した。

そして気付いた。この学校の周りに人がないことに。

つまり、そういうことか。今日は入学式ではない。今日が入学式ならば僕以外にもたくさんの新入生が居るはずなのだから。

んっ。何だ？これ。

僕の鞆のポケットに変な紙切れが見え隠れしていた。僕は鞆からその紙を抜き取ったその紙切れには何か文字が書かれていた。

えーと、「都心に着いたら、まず下宿先を探しなさい。by母」

「追伸、下宿先が決まったら住所を書いて手紙を送りなさい。以上」

へっ。僕って住む場所決まってるじゃないの。僕はてっきり寮かなんかがあるものだと思っていただけだ。そういえばどこに住むのかそんな話全くしていなかったような…。

まずい。非常にまずい。いきなりホームレスとかってあり得るのか。

あれ？この紙、折りたたまれてるじゃないか。中にも何か書いて

あるのか。

そこには今の僕に必要であろう様々な情報が書かれていた。母親に感謝したいと一瞬思ってしまうほどではあったが、家に居た時に僕に直接話してくれていれば、今の状況にはなっていなかっただろうことを考えると素直には感謝できない。

まあ、これで僕が今しなくてはならないことがわかった。少し整理しよう。まず、今日は入学式の日ではなく、明日が入学式であり、母さんは僕が下宿先を決めるのに時間がかかるであろうことを予想して1日早くこっちに行かせた。そして僕は下宿先を探すために仲介業者さんのもとに行かなくてはならない。その住所がこの紙に記されていた。

「空いているところがない？うそ？」

「申し訳ありませんね。今年度はこの近くの学校に入学する生徒さんの数が大変多くてね。皆さん、早めに下見にいらして契約をしていかれましたよ」

「終わった」

僕は大きな荷物を公園のベンチに置き、座りながら頂垂れた。

はあ。今日からどこに寝泊まりすれば良いんだ。都心に知り合いなんて居ないし、この公園には雨をしのげるような場所も土管なんて物もない。

「あらっ。もしかして瞬くん」

僕ががつくりと肩を落として考え事していると不意に女性から話しかけられた。彼女は僕のことを知っているようだ。僕にこんな美人の知り合いなんていないと思っていたのだけれど。

「えーと、僕の名前は瞬ですが。僕の頭にいくら検索をかけてもあなたのような美人のお名前がヒットしないのですが」

「もう、美人だなんてお世辞が上手になったわね。人妻をおだてても何も出ないわよ」

人妻…。

僕は先程以上に肩を落とした。まあわかっていたさ。美人な人が相手に困っているわけなどないのだから。

「お世辞じゃないですよ。っとそれは良いとして、僕と知り合いなんですか」

「本当に忘れちゃっているのね。あなたが十歳ぐらいの時、娘のみそぎを家まで送り届けてくれたの覚えてない？」

「思い出しました。みのりさんですか」

「正解」

思い出した。十歳の時に出会った女の子であるみそぎちゃんのお母さんがみのりさんだ。そういえば別れる際に引越すとかって言うていたっけ。

「ところでこんなところで何をしているの？瞬くんもこっちに引ッ

越してきていたの？」

「あーと、違います」

僕は現在置かれている状況から何故こっちに来たのかなど全ての理由を話した。

禍を転じて福となす

「うちに来なさい」

僕の説明を聞いた後、みのりさんは突拍子もないことを言い出した。まあ僕としては大変ありがたいことではあったのだけれど。

「そんな悪いですよ」

「いいのよ。いいから来なさい」

そう言ってみみのりさんは歩きだしてしまった。僕はポツンと取り残されてしまいそうになったので、申し訳ないと感じながらもみのりさんの後を付いていくことにした。

「ここが私の家よ」

みのりさんが指をさした先には大きな家が一軒とその横にアパートらしきものが建っていた。

「ここって家とアパートですけど、何で同じ敷地に一軒家とアパートが建ってるのですか？」

「それはもちろん私が隣のアパートの大家さんをやっているのよ」

ということとはまさか僕の悩みが解決されたということなのか。でも確か仲介業者の人は今、空いている所はないでしょうと言っていた気がするのだけれど。

「ちょうど今日の朝、借りるはずだった子が親戚の家に世話になることになったとかで、借りるのを止めるって連絡があったところだからどうしようか考えていたところだったのよ」

僕はなんて幸運なんだ。僕の未来に光が差し込んできた。僕にはみのりさんの姿が女神に見える。

「良いのですか。僕がそこに住んでも」

「ええ、もちろんよ。あの子も瞬くんなら良いって言うでしょうから」

「ありがとうございます」

んっ？あの子って誰のことだ。ああ、みそぎちゃんのことか。

「瞬くんの部屋は201号室だから荷物を置いたら、いったん私の家まで来てね。みそぎにも顔を見せてあげて」

「わかりました。では荷物置いたらすぐ行きます」

そう言っ僕は部屋の鍵を受け取り、階段を上ってから僕の新しい住まいに入って行った。中々広い部屋だ。8畳くらいはあるし、家具家電付きでバストイレも別になっている。これは本当に良い物件だ。これこそ禍を転じて福となすといったところだろう。まさに僕のためにある言葉のようだ。

おっと、早く下りていかないと。みそぎちゃんはどんな女の子になっっているのだろうか。みそぎちゃんも成長したんだよな。でもイマイチ昔の記憶が曖昧でどのような感じであったのかがわからない

な。

僕は神代家のドアをノックした。

「瞬くんね。どうぞ入って」

そう言ってみのりさんが招き入れてくれた。

「お邪魔します」

僕は少し緊張しながら神代家に足を踏み入れた。

「お母さん。こんな時間に誰が来たのよ。今日のご飯はまだ？」

二階から大きな物音をたてながら誰かが下りて来た。まあ誰かってみそぎちゃんなんだろうけれど。それにしても誰が来たのかという話から夕飯の話にチェンジとは何の脈絡もない。

「誰でしょう。自分の目で確かめてみなさい」

みのりさんはみそぎちゃんにそう言くと左手の部屋に入って行った。恐らく台所だろう。

「ちょっとどういことよ」

みそぎちゃんは文句を言いつつも玄関までやってきた。

僕はどうすれば良いんだ。放置プレイはものすごく困る。どこに行けば良いんだ。そんなことを冷や汗をかきながら考えていた僕とみそぎちゃんの目が不意にあった。

何て言えば良いんだろう。「久しぶり」とかって手を挙げながら
言えば良いのか。

「えーと、久しぶり…」

ダダダダダッ

僕が「久しぶり」と手を挙げて言おうとしている最中にみそぎちゃん
は踵を返し、みのりさんのいる左手にある部屋の中に言っ
てしまった。

「何で、瞬くんがここにいるのよ？」

「自分で聞きなさい」

左の部屋からみそぎちゃんの怒鳴る声とさらっと流すみのりさん
の声が聞こえる。

だから放置プレイは止めてくれ。さっきからこの家の人は…そん
なに放置プレイが好きなのか。僕は別にM属性ではないからうれし
くもない。まあS属性というわけでもないけれど。

「久しぶりね」

みそぎちゃんが部屋から顔を出し、無愛想ではあったが、挨拶を
してくれた。

「ああ、久しぶりだな。それにしても良く僕だってわかったな。み
そぎちゃんはいびり大人っぽくなってたから最初はわからなかった

よ

「当たり前でしょ。だって…」

みそぎちゃんは顔を真っ赤にして口ごもってしまった。

「だって何？」

「何でもない！それよりみそぎちゃんって止めて。もう、ちゃんなんて年じゃないから」

みそぎちゃんは後ろを向いてしまった。ちゃん付けを止めろってことは何て呼べばいいのか。みそぎさん？

「えーと、みそぎさん？」

「みそぎでいい！」

みそぎちゃん…みそぎは僕にそう言つとみのりさんの居る部屋に戻って行った。

だから僕を放置しないでくれ。

「瞬くん。夕飯にするからこっちにいらっしやい」

ようやく玄間での放置プレイが終了したようだ。さすがの僕だって何の案内も無しに他人の家をうるちよろなどできないのだから、もっと早く移動しても良い状況にしてほしかった。

んっ？夕飯？

「悪いですよ。部屋を用意して頂けただけで僕は十分なのに夕飯までなんて」

「いいから来なさい」

みそぎが淒みを利かせて言ってきたので、手を振って戸惑っていた僕は素直に従うしかなかった。まあ不幸でも何でもなく、幸運なことだから嫌々では全くとっていいほどなかったのだけれど。

「頂きます」

テーブルの上には僕の大好きなすき焼きが用意されていた。鍋の中に入っている肉は牛肉であろうか、それとも豚肉か。まあ食べてみればわかるであろう。

それにしても誰か先に手をつけてくれないだろうか。僕とみそぎとみのりさんの3人での夕飯であるが、他人の僕が先に鍋に手をのばすのも少し気まずい。僕は横に居るみそぎと向かいに居るみのりさんを顔を動かさずに目だけで伺ってみたが、二人は僕の方をじっと見ているようだ。

これは僕が先に食べるということなのか。そうだとしてみまずは何に手をつけるべきだそうか。肉にいきなり手をつけるのもずうずうしい奴な気がして嫌な気がするが、白菜などの野菜に手をつけるのも遠慮しすぎで逆に悪かったりするのではないか。

僕の額から冷や汗が垂れる。

「もう、じれったいはね。早く食べなさいよ。ほら、私がよそって

あげるわ」

しびれをきらしたみそぎが僕にお椀をよこせと目で訴えかけてきた。

僕の予想は一応、間違いではなかったようだ。僕が先に食べて感想を言ってから、みそぎとみのりさんは手をつけるつもりだったようだ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

僕はみそぎからすき焼きをよそってもらい、お椀を受け取った。

うっ。こ、これは。

僕が受け取ったお椀の中にはお肉オンリーしか入っていなかった。

僕はそれなりには肉は好きだが、野菜だってけっこう好きなんだ。というか好み以前に他人によそってあげる場合は普通に考えれば、様々な種類を均等になるようによそうのが普通じゃないのか。まあ、僕の普通がここでの普通とは限らないから、なんとも言えないのだけれど。

僕はお肉のみが入ったお椀に箸をのばし、食べた。

「おいしいです。みのりさんは料理がお上手なんですね」

「あつたり前ですよ。私のお母さんなんだから」

僕はみのりさんに言ったのだけれど、何故かみそぎが答えた。「私のお母さんなんだから当り前である」という発言には、つまり「私もできる」的なアピールが入っているのだろうか。

「ああ、そうだな」

僕はみそぎから視線を外して答えた。みのりさんは「うふふ」と笑っていた。

そんなこんなでみそぎとみのりさんも食べ始めた。

みそぎは自分のお椀には肉、白菜、葱、キノコ類など様々なものをバランスよくよそっていた。

何故、みそぎは僕には肉しかよそわなかったんだ。これは謎である。聞ける雰囲気ではないので、永遠の謎となるであろう。

僕らの夕食はこのような感じで、無事に終了した。僕はその後、部屋の整理などもあるということで、お礼を言った後、早めに帰宅した。そして何だかんだでとても疲れた1日であったことを思い出し、眠りにつくのであった。

朝の出来事

「ぐはっ」

みのりさんの経営するアパートでの新生活最初の僕の朝の目覚めはとても快調なものではなかった。

僕が何かの衝撃により、目を覚ますと本当に疑問であるが、僕の部屋にみそぎが居た。

別にみそぎが隣で寝ていたといったようなおいしいというか僕の昨晚を疑ってしまうような状況であったという意味では断じてない。単純に僕が目を覚ますと僕の視界にみそぎが居たというだけだ。まあ、きつとというか確実に僕が感じた何かの衝撃はみそぎによるものだ。

「瞬、朝よ。起きなさい」

朝であるのは窓から朝日が差し込んできていることからわかっている。ここで「昼よ」って言われたら驚くだろうけれど。そう言えば呼び方が変わっているな。詳しく言えば僕の名前の下にくんが付いていない。様々な疑問が浮かんだが、やはり一番疑問なのは、何故みそぎがここにいてかつてことだ。僕は様々な疑問はいったん放っておき、一番の疑問をみそぎにぶつけることにした。

「みそぎ、何故お前がここにいるんだ」

「起こしに来たからよ」

みそぎは間髪いれずに答えた。

返答はやっ。少しは間をおけよ。そしてお前の説明はいつも不十分だ。僕には全くと言っていいほど意味がわからない。

んっ？僕は…僕はとても重大なことに気づいた。僕、昨夜戸締りしたよな？いや、確実に鍵をかけたはずだ。

「お前、どうやってこの部屋に入った！」

「どうやってって、あなた馬鹿？玄間の扉から決まっているでしょ。ま、まさか私が窓から入ったとも思ったの？」

「思わねえよ。ここは2階だからな」

「まあ、さすがの貴方にもナノ、いやピコメートルほどの脳みそはあったようね」

みそぎは訂正してさらに酷いことを言いやがった。

「ピコって10のマイナス12乗じゃないか。あきらかに虫とかよりも僕の脳みそは小さいってことだぞ」

「えっ？違うの？」

「真面目に驚かれた！」

「さっきの話だけど、あなたが聞きたいのは鍵のかかっていたはずのこの部屋に私がどうやって入ったかってことでしょ。あなた誰が大家のアパートに住んでいると思っているの？」

「みのりさんだろ。って!？」

「ようやくわかったようね。大家のお母さんがマスターキーを持っていけないはずがないでしょ」

「だからって使うなよ!鍵がダメなら僕のプライバシーは何が守るんだ」

「もう、うるさいわね。とにかく早く着替えて私の家に来なさい。10分以内だから、はい、急ぐ」

僕は文句を言いながらも支度を始めた。それにしても犯罪の領域だろ。持っているのはわかるが、そんな簡単に使っていないわけがない。このアパートにはプライバシーがないのか。今度お隣さんとかに注意を促しておこうか。まだ会ったことないけれど。

僕は顔を洗って適当な私服に着替え、何とか9分と少しくらいで神代家に辿り着いた。玄間のドアをノックするとすぐに「遅い!」とみそぎに怒られながら招き入れられた。しっかり時間を守ったはずなのに何故怒られなければいけないのかは疑問でならないが、僕はしっかり「ごめん」と謝って中に入って行った。口答えとかできないし、しょうがないだろ。

僕がキッチンのある部屋に入っていくと、朝食が用意されていた。

「おはよう、瞬くん。朝ご飯よ。さあ座って」

みのりさんが朝の挨拶をしてくれた。みそぎとみのりさん、そしてみのりさんの旦那さん、つまりみそぎの父親は既に席についてい

た。

僕は何故、昨日の夕飯に引き続き神代家の朝食に御呼ばれされているのだ。僕は戸惑っていた。

「ほら、早く座りなさいよ。食べられないでしょ」

みそぎが隣の席を叩きながら、僕に座れと促した。

「ああ」

僕は状況が飲み込めないままとにかく席に着いた。

「頂きます」

神代家一同が一斉に言った。

「い、頂きます」

僕も遅れて言った。

皆、僕が居ることに疑問も何も感じていないように朝食を食べ始めた。

ええ？この状況に疑問を感じているのって僕だけなのか。普通におかしくはないですか。僕は一部屋借りているだけの赤の他人ですよ。何故、皆さんは普通に食事をしているのだ。みそぎのお父さんなんて初めて会ったのに、良いのかこの状況。

僕は意を決してしゃべり出した。

「えーと、昨日も夕飯をご馳走になってしまった上に今日の朝食までもなんて申し訳ないです。ありがたく頂きます」

僕がそういうと、何言っているの的な目で神代家一同の視線が僕に集中した。

「何言ってるの？昨日、三食付きでアパート借りることになってるでしょ」

みそぎが僕の発言に対して答えてくれたことで、僕の疑問が解けた。

そういう契約になっていたのか。知らなかった。でも他の部屋の人と家賃は変わらないはずであつたと思うのだけれど。

「ごめんなさい。そういうえば、瞬くん本人には言ってなかったわね。私が決めたの。みそぎが小さい時にお世話になったから、そのお礼に食事つきにしようって。だから遠慮しなくていいのよ」

みのりさんが説明してくれた。

「そうだったんですか。それではお言葉に甘えさせて頂きます」

そうか。僕だけが知らなかったのか。でも良いのか。年頃の娘がいる家に男を簡単にあげてしまつて。でもそんなこと言ったら、男の家に年頃の娘を一人で行かせている時点で間違っているのか。

僕はおいしい朝食を食べた後、いったん自分の部屋に戻った。

そういえば結局、みそぎのお父さんとは一言も言葉を交わさなかったな。何か無口っぽい感じだったしな。

今日は午後から入学式のはずだ。準備をしておかないと。

あつ…。母さんに下宿先が決まったという手紙を送るの忘れてた。やばい、非常にやばい。

僕は結局、午前は母さんに手紙を書くことに時間を費やすことになった。

入学式

現在、僕は上京してきて以来起こった出来事を一部要約して手紙に書き起こしている。なかなか書く量が多いため朝の9時から始めて11時までかかってしまった。

はぁー疲れた。少し休もう…。

「ぐはっ」

この衝撃というか痛みは今日の朝味わったものと同じだ。つまり、みそぎによるものということだ。お腹にきたこの衝撃は肘かそれとも踵か。

「瞬。あなた何寝ているのよ。今日の午後は千秀学園せんしゅうがくえんの入学式よ」

「ああ、僕寝てしまっていたのか。あ、えーと、朝から気になってはいたんだが、何で僕の名前にくんがなくなっただんだ？」

「…いいでしょ！あなただけが呼び捨てじゃ不公平だと思ったのよ」

みそぎが少し顔を赤らめて言った。

「ふーん、まあ確かにな」

「ところで何故あなたは制服に着替えてすらいらないのかしら」

みそぎが眉をぴくぴくとさせながら言った。

僕は咄嗟に時計を確認した。現在12時。千秀学園は今日から僕とみそぎが通う学校の名前で、入学式は午後1時からだ。まあここから歩いたら20分くらいだから余裕だな。

僕はそう思ったのだが、みそぎは僕とは意見が違っていたようだ。一瞬、焦りを見せた僕が余裕そうな顔に戻るとみそぎは今にも「ぶちっ」と音が聞こえそうなくらいの顔で僕を睨みつけた。

「ああ、今から着替えるよ」

「今から、昼御飯よ。まったくあなたの頭には計画性って言葉がないのかしら。あなたのせいで私の予定までくずれてしまうじゃない。」

「あの、わかったから。先に戻っててくれよ。着替えられないじゃないか」

僕がそう言うのと急激にみそぎの顔が真っ赤になっていった。

「わかってるわよ!」

みそぎは怒鳴り声をあげて僕の部屋から出て言った。

「表情が異常なまでに豊かな奴だな」

その後、僕は新調したばかりの制服に急いで着替え、ダッシュで神代家へ向かい、昼食を頂くのであった。

「瞬。早くしなさい。遅れるわよ」

みそぎ。お前は僕の親か何か。

「行つてきます」

僕とみそぎは徒歩にて学校に向かっているのだけれど……。あつ、入学許可証忘れた。あと20分くらいあるし、走れば間に合うか。

「みそぎ、悪いのだけれど先に行っていてくれないか。入学許可証を家に忘れたみたいなんだ」

「はっ？あなたが準備しておかないからいけないのよ」

「はいはい。僕が悪かったよ」

僕はそう言つて家に向かつて走り出した。

「急がないと間に合わないわよ」

後ろからみそぎの声が聞こえたので、僕は手を振つて了解の合図をした。

「あつた、あつた」

やはり手紙を書いていた机の脇に置きっぱなしであつた。

「やばっ。急がないと遅刻じゃん」

僕は入学許可証をとるとすぐに家を飛び出した。もちろん鍵はちゃんと閉めてから。戸締りは大切だからな。プライバシーを守るという意味でも。まあ僕にプライバシーは与えられていないようだけ

れど。

ん？僕が千秀学園に走って向かっていると、僕がみのりさんと出会った公園のしげみの前で髪を一つ結びにした12歳くらいの女の子が一人でポツンとしゃがんでいた。

僕はどうするべきだろうか。見て見ぬふりをする、声をかける、スカートをめくる。さてこの3択のうちどれをとるべきだろうか。まあ僕としてはもう答えは決まっているのだけれど。

僕は辺りを見回した。うん、誰もいない。ということは僕が何をしても誰に咎められることはないということか。それならば…。

僕は女の子めがけてヘッドスライディングをした。結局、僕は4択目を選ぶことにしたのだ。最初から僕はこの選択肢しか頭にはなかったのだけれど、一応悩んだふりだ。

「きゃー」

「ずさー」と音を立てながら女の子に接近した僕は驚いた女の子が立ち上がったことにより予想外のものを見ることがとなった。

もちろんパンツなどではない。パンツは予想の範囲内だ。

僕が見たものはドラゴンの子供であった。もちろんクマさんの絵が描かれたパンツも見えたのだけれど。

ドラゴンは魔獣の中でもトップクラスの力を持つと言われている種類じゃないか。その子供が何故こんな街の中にいるのだ？

「何ですか、あなたは？見ましたか？見たんですね？」

「ああ、えーとクマさん」

女の子はぱつとスカートを抑えた。

「違います。私のパンツの話なんかこれぼっちもしていません。と
いうか見たんですね、私のパンツ。あなたには大人としてのモラル
がないんですか？」

「えーと、僕まだ学生だし」

「そういう問題じゃありません。あなたには人間としてのモラルが
ないんですか？」

「えーと、僕人間じゃないし」

「そうなんですか！？」

「いや、嘘だけど」

「嘘なんですか。あなたは嘘をついたんですね。嘘は泥棒の始まり
なんですよ」

「そんなこと言ったら人類全員が泥棒予備軍だよな」

「確かにそうですね」

何か凄くテンションの高い子だな。結局、話がそれまくってドラ
ゴンのこと忘れてんじゃないのか。

「ところで、それドラゴンの子供だよな？」

「やはり見たんですね？もう生かしてはおけませんね」

「え？何？僕殺されちゃうの」

「違います。このドラゴンの子供のことです」

「え？そっち？君ってけっこう残酷？」

「冗談です。冗談ついでにこのことは黙っておいてくれませんか」

「何のついでかはわからないけれど、別にしゃべるつもりはない。しゃべったら後々めんどくさそうだしな。それに誰も信じないと思うぞ。この街中にドラゴンがいるなんて。実際、ドラゴンの生態って未だに不明らしいしな」

「そうですか。ありがとうございます」

「でも危険じゃないのか？小さくてもドラゴンだぞ」

「大丈夫です。怪我をしているこの子を手当してから私になつきまくってますから」

そういつて女の子がドラゴンの方に手をのばすとドラゴンは「けほっ」と言って火を吐いた。

「ひゃっ」

「おいおい、本当になつかれているのか。火吹かれてるじゃないか。」

「偶然です。偶々です」

女の子はそう言って手を抑えた。

「まあ、いいや。手を見せてみる。少し火傷したのだろ」

「こんな大丈夫です」

「いいから見せろ」

僕は女の子の手を無理やり引っ張った。ああやはり少し火傷しているじゃないか。僕は女の子の手に気を送ってやった。女の子の手の火傷は見る見るうちに回復し、火傷があったことすらわからないくらいになった。

「凄いです。手品ですか？」

「まあそんなところだ。ところでドラゴンの怪我ってどんな怪我だったんだ？」

「そうですね。何かに引っかかれたような感じでした」

引っかき傷か。他の魔獣にやられたものだろうか。そうするとまだ近くに居たりしてな。

「危ない！」

急に水の玉が僕たちの居る場所に飛んできた。僕は咄嗟に女の子とドラゴンを抱えて左に避けた。

予想的中か。僕の目の前には鳥型の魔獣が大きな翼を広げていた。

「そのドラゴンは今後どうするつもりだ？」

僕は女の子に問いかけた。女の子はドラゴンを抱えていたが、ドラゴンは暴れたりもしていない様子だで、女の子の頬を舐めていた。なついているというのも嘘ではなかったのかもな。

「飼います。親に何と言われようとも飼います」

「そうか。しっかり世話しろよ。僕がこの場はおさめてやるから」

鳥は僕に向かって鉤爪を向けてきた。僕はそれを右に飛んで避けた後、横から鳥の頭を蹴り飛ばした。もちろん足に気を集中した状態でだけれど。

僕が魔獣と戦うのはこれが初めてではない。実家にいた際に魔獣と戦う機会があったのだ。僕の実家は田舎であつたし、森なども近かつたから内緒で森などに遊びに出かけたりもしていた。その際に魔獣と出会ってしまうこともあつた。

おっと、鳥は蹴り飛ばされてもすぐに体制を立て直し、今度は複数の水の玉を飛ばしてきた。僕の後ろには女の子とドラゴンが居るのだから、数に頼った攻撃は止めてもらいたいところだ。僕は拳に気を集中させ、水の玉めがけて拳をつきだした。すると水の玉ははじけ飛び、消えてなくなった。鳥は僕に水の玉が効かないことに気づくと今度は口から大量の水をホースから水を飛ばすように吐き出

した。僕は気を体中にめぐらせ、真正面から水の中に突っ込んでいった。

「くらえ」

僕は水の中から飛び出し、空中で一回転してから鳥の頭に踵落としをお見舞いした。鳥は地面に叩きつけられ、動かなくなった。僕は鳥の頭に手をのせると一気に気を流し込んだ。すると鳥は灰のようになって跡形もなく消えていった。何故、気を流し込むと倒せるのかはつきりとはわからないが、おそらく人間同様、細胞分裂の回数には制限があり、一気に気を流し込むことで細胞が活性化し、老化に似た現象が起き、細胞が死んでいったのではないかと思う。まあ倒せれば何でもいい。

「大丈夫だったか？」

「はい。ありがとうございました。あのお名前を聞いてもよろしいですか？」

「ああ、僕の名前は天上瞬だ」

「天上さんですね。私は春風舞はるかぜまいと言います」

「春風か。よろしくな」

僕は春風に別れを告げると千秀学園へと向かった。

現在時刻午後の3時。僕はようやく千秀学園に辿り着くことができたわけだが、まあ間違いない遅刻だ。遅刻というか欠席といって間違いないだろう。僕が着いた時には入学式を終えて下校す

る生徒が居たのだから。

僕はその後、校門でみそぎを待ち、あーだこーだと色々言われるはめになるのだった。学校はみそぎが僕は風邪で休んだということにしてくれたらしいので、入学が取り消しとかそんな事態にはならなかったようだから、一応みそぎには感謝している。だが、帰り道の間中、説教というのはきついものだ。

「ご機嫌取り」

僕の1日はみそぎの踵落としから始まる。これが痛いなんのつて、もうとてもじゃないけれど寝てなんていられない。いくら僕がそれなりに鍛えているからって寝ている時にまで、腹筋に力をいれているわけなどない。もっと優しく起こして欲しいものだ。今日の朝は昨日よりも何倍も威力が大きかった。昨日のことが原因なのだろう。

昨日、僕は入学式をさぼってしまったのだ。さぼったというのは事実であるが、故意的にはないし、あそこまですつと説教されるのはおかしい。必死に学校まで走ったにも関わらず、下校中はずつと説教。家に着いてからもみそぎの部屋に呼ばれてずつと説教。みのりさんが仲介に入ってくれなかったらきつと夜通し説教を受けていたことだろう。

「行つてきます」

僕は神代家で朝ご飯を頂いた後、みそぎとともに学校へと向かった。みそぎは僕の隣を歩いてはいるが、ずつと不機嫌なままだ。

はあ、まいったな。このままってわけにもいかないし。

「みそぎ」

僕はみそぎに話しかけることにした。

「何よ」

みそぎは不機嫌オーラ全開だ。僕は少しびくついてしまった。

「今日の放課後空いてるよな。ちょっと出かけないか」

みそぎはポカーンとして返事もせずに立ち止まった。何かをおごつて機嫌をとろうかと思ったのだけれど、僕の作戦は失敗のようだ。

「あー、やっぱりいいや。みそぎも忙しいもんな」

僕は手を振って、そのまま歩き始めた。はあ、次はどんな作戦でいこうか。みそぎの機嫌が良くなることって何だろうな。

「ちょっと」

「へっ?」

考え事をしていた僕に急にみそぎが話しかけてきたので、僕は変な声を出してしまった。

「まだ、…ない」

下を向いたみそぎが小さな声で言ったので、僕は聞き取ることができなかった。

「????」

「まっまだ、私断つてない!」

僕が頭に?マークを浮かべているとみそぎが顔をあげて大きな声で言った。

まだ断つてないということは…どういうことだ。断っていないイコールダメではないが成り立つのはわかる。しかし、それイコール了承だとは限らない。いやいや、この流れは了承ととって良いのではないか。だが待てよ。まだ断っていないということは今から断るという選択肢も残っているのではないか。うーん、難しい。「あなたのこと嫌いじゃない」と言われた時、言った相手が僕のことを好きか、それともただ単に嫌いではないというレベルであるのかを見極めるくらいに難しい。

「えーと、つまり」

「付き合っただけで断っているの！」

みそぎはすぐさま僕から離れ、校門の方へ一人で歩いて行ってしまった。いつの間にか学校に着いていたようだ。

了承とるのが正解であったか、やはり難しい2択であった。さて、僕も学校へ入るか。えーと、そういえば僕は今からどこへ行けば良いのだろう。昨日の入学式に参加していないから自分のクラスがわからない。どこかにクラス分け表とかはっていないだろうか。

僕はあたりを探すことにした。しかし、どこにもクラス分け表示きものは掲載されてはいなかった。靴箱にはA組などとシールが貼ってあり、一人一つの靴箱が与えられていて、名前のシールが貼ってあったが、何組かもわからない僕が自分の名前を手当たり次第探すなんて言うのは無理な話だ。

結局、僕は靴を脱ぎっぱなしにし、上履きを履いて職員室に向かうことにした。

職員室とはやはり1階にあると相場が決まっている。地震が来た際に職員が真っ先に逃げられるようにそうなっているのか。まあ、大きな地震の場合、1階なんてのはつぶれてしまうのが落ちだろうけれど。

この学校でも僕の期待を裏切るなんてことはなく、1階に職員室は存在した。

「失礼します」

職員の視線が一斉に僕に集まる。何て居心地の悪い視線だ。こんな視線を浴び続けたら、気の弱い奴なんて速攻で職員室を飛び出してしまっだろう。このシステムというかもう少し生徒が職員室に入りやすい環境にして欲しいものだ。

「えーと、すみません。僕、新入生なんですけど自分のクラスが分からなくなっちゃったので教えて頂こうと思ひまして、職員室に来たのですが」

「おー、天上。やっと来たか。待ちくたびれてしまったよ」

「???」

職員室の奥の方から誰かの声が聞こえてきた。しかし、なぜ僕の名前を知っている人がここに居るのだ。

「マッチくたびれてしまったよ」

「さっさと新しいマッチを買ってこい」

急に变なことを言い出すからつい突っ込んでしまったじゃないか。こんなボケ方をするのは僕の記憶の中では一人しかない。

「うーん、天上、君はいつもテンションが以上に高いね。幸せな気分なのかい」

やはりこいつか。僕にしゃべりかけながらそいつは僕のもとへ近づいてきた。

「何で、あなたがここにいますか？幸野先生」

「そんな冷たい言い方するなよ。僕は君に会いたかったからここにいますのだから」

何かこの発言にはいらつとしてしまった。

「僕はあなたに別に会いたくなんてなかったですよ」

「まあ、それはいいとして。僕はね、元々この学校の先生だったのだよ。今回、有望な生徒がたくさん入学するとか何とかで、この学園長に戻ってきてくれと頼まれてしまったね。ははは。もちろん君は僕のクラスの生徒だから」

何がもちろんなのだ。実家の方での学校でもずっと幸野のクラスだったというのにまたなのか。僕はもつと美人でおしとやかそうな女性の担任を期待していたというのに。

「それで、僕は何組なんですか？」

「C組」

C組だと。僕はまだC体験などしたことなどないのに、もうC組になってしまふなんて。僕はせいぜいA程度で止まっておきたかった。

「何急に頂垂れているんだい。やはり君は面白いね。本当に何を考えているかわからないよ」

公共の面前で床に頭を叩きつけようとしていたなんて、僕としたことが過ちを犯してしまうところだった。僕は即座に立ち上がり、「失礼しました」と挨拶をしてからC組の教室に向かい始めた。

はあ、C組か。

僕はC組の教室に辿り着いた。知り合いなどは一人もいなかった。

まあ、当たり前か。そういえばみそぎは何組なのであろうか。ここにはいないから別のクラスであることは明白ではあるけれど。

僕は黒板に描かれている座席表に従い、自分の席に座った。辺りから「担任はどんな人なんだろうな」とか「美人のひとがいいな」とか聞こえてきたが、過度の期待は持たない方が良さと思う。期待すればするほど後に衝撃を受けることになるのは自分であるのだから。まあ、僕はそこまで親切ではないから、教えてあげる何てことはしないけれど。

ちよつとしてから、ガラツと音をたてて、幸野が入ってきた。

さっき担任の話をしていた奴らはつと、やはり落ち込んでいた。

だから言っただろうに、過度の期待は持たない方が良く。まあ、言っていないのだけれど。

今日は最初の授業ということで、どの授業もガイダンスという感じで終わってしまった。

はあ、つまらないな。ガイダンスとかを僕は好きではない。なぜならば、どうせ受けなくてはならない授業であり、選ぶ権利などないのだからわざわざ説明を受ける必要などないと僕は思うからだ。さつさと授業をやってくれた方が、何か興味をそそる内容が出てくるかもしれないのにな。

そんなこんなで、もう昼休みだ。そういえば昼ご飯はないな。こっつて購買とかあったらどうか。僕は一応持ってきていた学校案内を取り出した。えーと、おっ、あった。2階に食堂があるようだ。今日はそこで食べるとするか。

僕が教室を出るとすぐに誰かに肩を掴まれた。

「瞬。どこ行くのよ」

みそぎであった。

「えーと、昼飯を食べに食堂」

「あるわよ。ここに」

「ん？」

みそぎが差し出した手を見てみるとお弁当が握られていた。

「お弁当よ。付いてきなさい」

付いていかないとその弁当はもらえないのか。それならば付いていくしかないな。奪い取るなんて選択肢もあるかもしれないが、僕がそんな野蛮なことをする人間であるはずがない。機嫌も良いみただし、台無しにならないように気をつけなくては。

みそぎの後を付いて行くと校舎と校舎を結ぶ通路にベンチが用意された、感じの良い場所に辿り着いた。

「座つて。食べるわよ」

「ああ」

僕はみそぎから弁当を受け取ると黙々と食べ始めた。この味は間違いないのりさんの味だ。そういえば契約が3食付きって言うていたから弁当も付いてくるのか。

「今日はどこへ行くつもりなの」

「えっ？」

どこへ行くって何の話だ。僕が授業を抜け出して遊びに行くとも思っているのか。僕はそんな授業料を無駄にするようなことなんかしない。まあ、授業料って確か無料だけれど。

「今日の放課後よ。どこかに連れて行ってくれるのでしょ」

ああ、そんな約束したな。あの時はみそぎの機嫌をとることに必

死だったからな。機嫌が良くなったことに満足して約束のことをすっかり忘れてしまっていた。

「えーと、どこか行きたいところあるか？僕、まだこっちに来たばかりでどんな店があるかもまったくわからないから」

「普通、男がエスコートするものでしょ。まあいいわ。私が良いお店に連れて行ってあげる」

エスコート？それって僕がみそぎをつてこと？でもエスコートって何か響きがSっぽくて嫌だな。僕はSではないし。そんな趣味は僕には決してない。

その後、僕は放課後すぐに校門という待ち合わせの約束をさせられ、途中までみそぎとともに教室に戻るのであった。ちなみにみそぎはA組らしい。Aの方が初々しくて良いな。羨ましい限りだ。

午後の授業も午前と変わらず、ガイダンスばかりだった。僕は何とかガイダンスという名の壁を乗り越え、現在校門にてみそぎを待っている。僕のクラスはさっさと終わったというのにみそぎのクラスはいつたい何をやっているのだ。まあ、僕のクラス担任が幸野だったからということもあるのかもしれない。「今日は終わり。帰っていいぞ」でホームルームが終わりだったからな。

さてただ単にみそぎを待つだけというのもつまらないので、ここらでここの世界観の説明をしておこうと思う。少しばかり遅いとも思っけれど、今まで僕が住んでいたのは田舎だったのでこの世界と元居た世界との比較をするのが難しかったのだ。実際にこっちに来てから様々な物を見たりしたが、田舎と都会とではやはり全然違っていた。

まずこの世界でやはり大きいことは前に説明した思うが、魔法の力を蓄えることのできる鉱物の存在だ。この鉱物のおかげで皆の生活が成り立っていると言っても過言ではない。この鉱物の存在により、こちらには電線などといった電力の供給システムは存在しない。まあ鉱物の存在により科学があまり進んでいないとも言えるのだけれど。しかし、水道だけは別で、こちらの世界にも存在している。人が魔法の力により出すことのできる水は純水だ。つまり完全な純粹な水で様々なイオンが溶けているということがないのだ。僕が元居た世界で言えばミリQ水といったところだろうか。そのため、生活に使う水としてはあまり良くない。よって水道のみ整備されている。あとこの世界の地形だが、僕が元居た世界とほとんど変わらないうだ。まるで、パラレルワールドのような感じだ。僕が元居た世界では魔法といった力は存在しなかったからあのような世界に発展したのだけれど、こちらは魔法が存在したためにこのように発展したという感じであるのだと僕は納得している。

まあ、科学が少し遅れていて魔獣がいるという問題はあるが、科学の遅れは鉱物のおかげでさほど困らないしそれなりには住みやすい世界であるのかもしれない。

「お待たせ」

みそぎが少し駆け足で走ってきた。

「だいぶ遅かったな。何かあったのか？」

「え？今、ホームルームが終わったところよ」

やっぱ幸野の奴、手抜きしやがったな。まあ、長いよりは短い

方が良いから別に良いのだけれど。

「そうか。まあ、行くか」

僕たちはそう言つて歩き出した。この後、僕はみそぎに連れられてお洒落な喫茶店に入った。みそぎは10歳の時からこの街に住んでいるので、けっこうお店には詳しいみたいだ。今日、入っているこのお店も結構行くらいしい。

「アップルティーとそのロールケーキをお願いします」

みそぎは手慣れた感じで注文した。

「えーと、こつ、コーヒーを一つ」

僕は何がおいしいのかも良く分からなかったので無難にコーヒーを注文した。

「ブレンドコーヒーでよろしいですか？」

はっ、コーヒーにも種類があつたのか。僕としたことが何てミス
を。

「あつ、ブレンドでいいです」

「お砂糖とミルクはいくつお付けいたしますか？」

「一つずつをお願いします」

何だかんだで注文に時間をかけてしまった。僕がもっと慣れてい

れば「ブレンドを一つ、砂糖とミルクを一つずつつけて下さい」といった感じで一発注文が可能であったのに。

今回は僕が誘ったのだから僕が全て払い、僕とみそぎは注文したものを持って奥の席に向かい合って座った。座るのと同時にみそぎはケーキをおいしそうに食べ始めた。

「ん？瞬も食べたいの？」

みそぎがおいしそうに食べているのを僕がじっと見つめていたので、みそぎは僕が食べたいのだと勘違いしたようだ。

「いや、別に」

僕は生クリームとか甘ったるい感じはあまり好きではないから、別にいらないのだけれど。

「食べたいの？」

何か断つてはいけなような雰囲気を出しながら、再度みそぎが問いかけてきた。はあ、しょうがない。

「はい。食べたいです」

「しょうがないわね。あなたがどうしても欲しいって言うから、優しい私は少し分けてあげるんだからね」

はいはい、そうですね。

突然、みそぎの動きが止まった。そして見る見るうちに顔が真っ

赤に染まっっていく。

急に何だ？何があった？

「おい。いったいどうした？」

「はい！」

みそぎが僕に向かってフォークを差し出してきた。僕はフォークを受け取り、少しだけケーキを食べた。

まあ、おいしいのだけれど。やはり甘ったるいな。

「ありがとう」

僕はそう言って、みそぎにフォークを返した。

その後、みそぎは顔を真っ赤にしたまま黙々と食べ続けた。帰り道でもみそぎは一言もしゃべらなかつたが、機嫌は良くなっているのでまあ良いだろう。こうして僕の本日のミッションは終了した。

二人暮らし

今日は学校が始めて初の日である。まあ、まだ入学式も含めたら2回しか学校に行っていないのだけれど。つまり、入学式が木曜日で、昨日のガイダンスが金曜日だったということだ。これなら金曜は休みで良かったのではないかと思うのは僕だけであろうか。

今日は休みではあるが、神代家の朝食の時間は通常らしいので僕は今日も早起きだ。少し違うな。僕は今日も早く起こされたと言った方が正しい。その影響もあってか、僕は学校があるものだと思っ
て制服に着替えてしまった。みそぎからは「あなた馬鹿？今日は休日でしょ」とか言われてしまうし、元と言えば幸野が悪い。ホームルームをさぼり、今日が休みであることを言わなかったのだから。全ての元凶は幸野にある。僕は他人に非を押し付けた。

さて、休みと言っても何をしようか。僕は午前は適当に部屋の片づけなどをして過ごし、午後は1時間ほど悩んだ末に外を散歩することに決めた。1時間も悩んだ末にすることではないとは僕も思うのだけれど、他にすることがないのだから仕方がない。

実際のところ、こちらに来て日の浅い僕にとっては散歩するだけでも様々な発見があるだろう。僕だって必死に考えた末に散歩を良しとしたのだ。

こちらの世界には電気を供給するという考え方がないために電線や電柱といったものがなく、通路がとても広々とした感じがして気持ちが良い。電線が網のように張り巡らされた世界はやはり、拘束されているような気がして嫌な気分がするものだ。皆にもこちらの世界を味あわせてあげたくなってくる。まあ無理なのだけれど。

僕がとても良い気分で歩いているといつも通る公園に来てしまった。

そこにはやはりというか、「お前は公園に住んでいるのか」と聞きたくなってしまうほどに僕がこいつと会う時は必ずこの公園であるというか、もう僕はこいつとはここで会う運命にあるのか春風がいた。何かもう自分が何を言っているのかがわからない。

「あ、そこで何か意味不明なことを考えてるような顔をしているのは天上さんではないですか」

「お前は僕の心が読めるのか」

「読めるわけじゃないですか。そんなひねくれたような変な顔をしていたら誰にだってわかりますよ」

「ひねくれた顔なんかしてない！」

ひねくれた顔ってどんな顔だよ。ひねくれるのは性格だろ。まあ、頭に？を浮かべていたかもしれないけれど。

「そうですか」

「おい、ところで春風。お前も暇を謳歌しているのか」

「お前もということは天上さんは退屈しのぎに散歩でもしているのですか？ちなみに私はとても忙しい身なので一緒にされて少し業腹といったところです」

「お前の読み通り僕は散歩だ。お前は…、とても忙しそうには見えないのだが」

「目で見たことが全てではないのです。私の頭の中は現在フル回転で稼働中なのです」

「何か悩み事か？」

「天上さんに話すようなことはありません。乙女には秘密が一杯なのですから」

「そうかそうか」

秘密か。まあみそぎの考えていることなんかもまったくわからないしな。

「実はですね」

「話すのかよ！」

どういう脈絡でそうなった。乙女には秘密が一杯ではなかったのか。

「実はですね。例のドラゴンの子供なんですけど、飼おうと家に連れて帰ったのですが、今日の朝に親に見つかってしまいました」

「なるほど。つまり親に反対されたってわけか」

「反対されたなんて優しいものではありません。親は怯えてしまいまして話し合いの余地すらありませんでした」

「まあ、魔獣って基本的には恐怖の対象であるからな。僕やお前がイレギュラーってことなんだろうな」

「そういうわけでこうして公園で今後この子をどうするか考えているわけです」

そう言った春風の後ろには先日見たドラゴンの子供がいた。

「それで何か良い案は浮かんだのか？」

「うーん、そうですね。私の中ではやはりドラゴンを飼うのは無理なんじゃないかっていう案がもつつむじのあたりまでのぼっているのですが」

「それを言うなら首のあたりだろうが。口を超えたら声に出るだろうが。ってあれ？」

まあ、確かに案として声に出してしまっているしな。間違っではないのか。それよりもあれだけ「飼います」と言っていた奴が、もうすでにあきらめかけているのはどうなのだろうな。

「ところで天上さんは現在どちらにお住まいなのですか？」

「え？僕か？僕は今、ここから10分くらいのアパートで独り暮らしだが」

春風が急に話題を変えたので僕は少し驚いてしまった。

「独り暮らしですか？」

春風は驚いたというか喜んだように僕に聞き返してきたのだけれど、何か嫌な予感がする。僕は「ああ」とだけ返事をした。

「今から行っても良いですか？だってあれじゃないですか。こんなところではドラゴンの子供が他の人に見つかってしまうのではないですか。ちよとゆっくり考えられそうな場所を探していたんですよ」

こいつ今から僕の家に来るつもりなのかよ。僕が何のために散歩をしていたと思っているのだ。家に戻ったら意味ないではないか。僕の家には遊ぶ道具なんて何もないのにな。

「えー」

僕はあからさまに嫌な顔をした。

「天上さん。知っていますか。人間は「はい」で始まり、「はい」で終わるんですよ。だから「はい」と言って下さい」

「知っていますか？」って知らねえよ、そんな言葉。聞いたこともない。そして何がだからなんだ。

「そんな言葉、僕は知らない」

「知らないんですか？」

「まるで一般常識を僕が知らないみたいな反応をするな。そんな言葉本当にあるのか」

「人間はですね、ようやく物事を考えられるようになってくるころ

にハイハイを始めるんですよ。つまり「はい」から始まるんですよ。そして人間は死ぬとどうなりますか？灰になるんですよ。つまり「はい」で終わるんですよ」

「うつ」

適当なことを言っているのだと思っていただけれど、それなりに納得のいく話でもある。

「さあ、天上さん。あなたは何と答えるのですか？」

「はい」

「じゃあ、行きましょう。さっさと行きましょう。案内して下さい」

くそあ、僕が「はい」と言ってしまうなんて。それにしてもこの諺だ。

「おい、春風。今の言葉って諺なのか？」

「へっ？違いますよ。ただの私のマイブームです」

マイブームかよ。僕は春風のマイブーム何かに負けてしまったのか。

僕は悔しいながらも、春風を僕の家まで案内した。男に二言はないのだ。

「ここが僕の家だ。まあ汚いところだが入ってくれ」

春風は少しキヨロキヨロしながら遠慮がちに僕の家に入った。もちろんドラゴンの子供も一緒だ。

「以外にきれいですね。私はてつきり足の踏み場もない部屋なんじゃないかと思つて入るのに足がすくんじやいましたよ」

「遠慮じゃないのかよ!」

僕らはそんな会話をしながら僕の家に入り、テーブルの前に座つた。僕は前日買つてあつた100%オレンジジュースをコップに入れてあげた。

「ん?これは100%のオレンジジュースですね」

「お前わかるのか?」

パックのラベルなんてチラツとしか見えなかったはずなのでこいつは味だけで100%だとわかつたということなのか。

「いいえ。勘です」

「勘かよ」

僕はがつくりと肩を落とした。

「というのは嘘です。ラベルがちらつと見えたんですよ。知っていましたが?100%のジュース飲みラベルに果実の切り口を載せることができるんですよ。天上さんがコップに注いでいる時にオレンジの切り口の絵が見えたんですよ」

「それは知っている。それは一般常識だ」

「そうでしたか。ところでこのドラゴン、やはり名前を付けてあげた方が良くないですか？ドラゴンの子供と違って呼びにくいですし」

「それは付けてあげた方がよいとは思いますが。お前、まだ付けていなかったのか？」

「まだですよ。だってまだこの子と出会って3日目ですよ。この子のことを何も分からないのに名前を付けるなんてできませんよ」

その考え方だと春風に子供ができた時はいつたいつ名前を付けてもらえるのだろうか。僕は半分呆れながら聞いていた。

「どんな名前が良いと思いますか？私としてはこの子女の子みたいなのでかわいらしい名前にした方が良いと思うんですよね。でもやはりドラゴンとしての威厳もある名前が良いと思うんですよ」

注文の多い奴だな。かわいくて威厳のある名前か。うーん。

「僕としては」

「決めましたー。フレアにします」

僕に聞いた意味ねえ。

「それで由来は何なんだ？」

「太陽フレアとかって知っていますよね？かつこよくて女の子の名前としてもいけるじゃないですか。それにフレアって兵器の名前

にもあつて威厳もありそうですし」

意外と考えてるんだな。春風って頭の回転が異様なほど早いよな。

「名前も決まったことだし、本題に入って良いか？」

「本題って何のことですか」

「お前は何のために僕の家に来たんだ！」

僕が何故お前を招き入れたと思っているのだ。フレアの今後を話し合うためではないのか。

「冗談ですよ。でも私、今名案が浮かんだんです」

「そうか。どんな案だ？」

「それでは聞いて驚いてください。独り暮らしである天上さんの家に預かってもらうんです」

そうか、確かに独り暮らしの家ならば親の心配をする必要はない。

「って、おい。僕は了解した覚えはないぞ」

「何を言っているんですか。こうしてフレアを招き入れているじゃないですか。もう預かっちゃって下さい。ちなみにご飯の心配はしなくていいですよ。私が持って来ますから」

ええ、何か勝手に話を進めているよ。

「だから、僕は了承してないって」

「天上さん。もう忘れてしまったのですか。人間は「はい」で始まり、「はい」で終わるんですよ」

まだ引きずるのか。

「それはお前のマイブームだろうが。僕まで強要するな」

それから、僕と春風は他愛もない話をしながら過ごし、フレアの今後の話はすっかり忘れてしまっていた。

「それでは私、そろそろ帰ります」

「ああもう帰るのか」

時計を見ると午後の6時を回っていた。あまり遅くなるのも危ないので帰った方がよい時間だろう。僕は春風を送って行った。僕が家に帰ると僕のベッドでフレアが寝ていた。

あ、あいつ。フレアを置いて行きやがった。本気で僕に世話をさせる気だったのか。

その後、夕飯の際に呼びに来たみそぎにフレアが僕の部屋に居ることがばれてしまい、少し怒られた。僕が訳を説明すると放っておくのはかわいそうとか何とか言って、以外にあっさり納得してくれた。異様に物分かりの良いみそぎに少し疑問であったが、僕としては説教を免れたので良い結果ではあった。

はあ、これからは二人暮らしか。違うか、一人と一匹暮らしだな。

良く分らない女達

僕はいつも通りに起こされ、登校し、授業を受けた。今日の授業は初めて教わることもあったのでそれなりにおもしろかったかもしれない。まあ僕は元居た世界である程度は学んでいるから、面白いと感じたのはこの世界の歴史だけだけれど。

さて今日も昼飯の時間だ。何故かはわからないのだけれど、みそぎは前もって僕に弁当を渡すということをしていない。かならず、昼休みに入ってから渡しに来るのだ。理由は定かではない。まったくもって予想もできない。だから僕は疑問に思っのを止めてしまった。

「はい、お弁当よ」

そう言うともそぎは校舎と校舎を結ぶ通路にあるベンチを目指して歩いて行く。この時、僕はまだ弁当を渡されていないから付いて行くしかない。

「おっ、天上。今日は一段とかわいらしい女の子を連れているね」

急に幸野が現れた。今の言い方だと、まるで別の日は別の女の子を連れていけるとられる可能性がある。ほら見ろ、みそぎが疑いの眼差しで僕を見ているではないか。隣にみそぎが居るのだから誤解を招くような発言は控えてほしい。僕の命に関わる問題だ。

「今日はってどういう意味ですか」

「何でもない。気にしないでくれ。それより僕はやっと理解したよ。前から気になっていたそのブレスレットを君がつけている理由が」

そう言って、幸野は去っていった。ブレスレットをしている理由？僕がこのブレスレットをつけているのには理由があったのか？これは昔、みそぎからもらったもののはず。

「あつ、あいつは僕のクラスの担任。変な奴なんだ」

みそぎは何も答えない。うんともすんとも言わない。何なんだ、この空気は。

ん？ぼくはあることに気付いた。昔、みそぎに言われた通り僕は常に左手にシルバーのブレスレットを付けているのだが、みそぎもつけているではないか。こ、これはもしかやペアルックというものではないか。そうか、そういうことか。幸野が僕にあのようなことを言ったのはそういうことだったのか。あの野郎、勘違いしやがってのにな」

「あ、当たり前じゃない」

ずっと黙っていたみそぎがしゃべり始めた。急に普通に帰ったので少し驚いてしまった。

「そ、そうだよな。今後何か勘違いされそうだし、はずしておくか」

僕がブレスレットを外そうと右手を左手のブレスレットにのばすとみそぎが僕の右手を掴んだ。

「駄目よ。はずしちゃ駄目って言ったでしょ」

「何で？」

「何でも！いいから。さあ行くわよ」

その後、みそぎは完全に普通に帰っていた。幸野がプレスレットの話をした時は確かに何かがおかしかった。うーん、まあ、きっと僕にはわからないことなのであろう。

「はあ、今日の授業もようやく終わったか」

僕は退屈な授業を何とか乗り越え、自宅に戻ってきた。

「それでお前はそこで何をしているんだ？」

あたかも当り前のように春風が僕の部屋でオレンジジュースを飲んでいた。あのコップに入っているオレンジの液体は間違いなく僕の部屋の冷蔵庫に入っていたオレンジジュースだ。僕にはわかる。誰が飲んでいいと言った。僕は絶対に言っていない。

「はあ、おかえりなさいです。天上さん。何をしているとは無粋な質問ですね。ここにフレアが居るのですから私が居て当然ではありませんか」

「居るのはまあ良しとしよう。だが、何故勝手に僕の、他人の家のオレンジジュースを飲んでくつろいでいる」

「これは私が持ってきたジュースですよ」

「違う。それはその冷蔵庫に入っている紙パックのオレンジジュースからコップに注いだものだ」

「それをあなたは証明できるんですか？ 天上さん」

「ぐっ！」

確かに証明する手段が存在しない。僕が紙パックにオレンジジュースの残量をメモっていたのなら減っているかどうかで証明が可能だったかもしれないが、あいにく僕はそのようなことはしていない。

「ふっふっふ。あなたはその程度の方ですね」

何がその程度なのかはわからないが、僕の失態だ。今度からは紙パックにラインを引いておくことにしよう。んっ？

「はっはっは。お前は重大なことを忘れてるぞ。お前の持つてきたというオレンジジュースの容器はどこにあるというのだ？ まさか容器なしに液体だけを運んだとも言うのか」

「ぬ。何が悪いんですか？ 私は大変のどが渴いていたんです。そこに飲み物があるのがいけないんです」

「開き直った！」

僕は帰ってきて早々にくだらない会話を春風としているわけだが、春風には先週末に僕の部屋のスペアキーを渡してあったので勝手に入ることができたのだ。僕の部屋にドラゴンのフレアがいるのだから

らその面倒をみる春風がこの部屋に自由に出入りできないのは困るだろうと思つての計らいだ。結局、春風はフレアを忘れて帰ることで無理やり僕の部屋で預からせることに成功したというわけだ。まあ、春風がご飯は持つてきてくれるのだから、僕はただ単に場所を提供しただけという感じなのだけれど。

「そうだ、春風。親はどうなった。怯えてしまっていたのだろうか？もう立ち直ったのか？」

「はあ、恐らくですが、記憶から抹殺してしまったみたいですね。私が帰ってからそんな話一度も出なかったですし」

「そうか。まあ嫌なことは忘れるに限るからな。でも、どうやってフレアのご飯を持つてきてるんだ？親に不審がられるだろうが」

「私もそう思つたんですけど、間食と言つたら簡単にごまかせましたよ」

「間食ねえ」

僕はそう言つて春風の持つてきたフレアのご飯をちらつと見た。まあ、時間的に春風が持つて来るご飯は夕飯前だから間食というしかないのであろつが、間食にしては量が多いと思つのは僕の気のせいだろうか。普通、間食と言つたら軽くパンを一つとかつて感じではないのか。うーん、疑問だ。まあきつと春風家は皆が大食いなのであろつ。僕はそう結論付けた。

ちなみにフレアの食事は1日2回で、朝と夜のみだ。昼は春風も僕も学校だから無理だしな。ご飯は春風が夕方ころに夕飯分と明日の朝食分を持つてきてくれるのだ。基本的には僕らの食べているも

のと同じで良いみたいだ。フレアは好き嫌いせずにも何でも食べるし。

春風は今日も日が暮れ始めるころに帰って行った。

僕が千秀学園に入学してから1ヶ月が経過し、僕もようやく学園に慣れてきた。新入生が慣れてきたところではいよいよ実技の授業も行われるようになる。つまり、魔法の扱い方なんかを実践しながら学ぶということだ。

さて、ここで僕としては非常に困った問題が発生した。僕は魔法が使えないのだから、学ぶことがない。これで僕は如何にして単位を得ることが出来るのだろうか。まあ、人によって使える属性なんかは違うわけだし、最終到達点的なものも違ってくるわけだから僕にも無事に単位を獲得できる可能性も無いとは言いついていいのだけれど、可能性が薄いことには変わらない。うーん、どうするべきか。僕は最近はそのことでずっと頭を悩ませていた。

「さて、今日から新しく魔法実習の授業が始まった訳だが、まずはそれぞれの属性ごとに分かれてもらうことにする。属性の書かれた看板のところに集まってくれ」

僕が頭を悩ませていると幸野が拡声器を使ってしゃべりだした。現在、僕は校庭にいるのだ。魔法実習の授業はクラス関係なく、学年合同で行われる。各属性ごとに担当の教師が付き、教わる仕組みなのである。先日、身体測定などが行われたのだが、その際に魔法の属性も調べられているのだ。ちなみに僕は属性をチェックしたが、不明という感じの結果だった。まあ、でも不明なのは僕だけではないだろう。なぜならば、属性は人によって現れるタイミングが違うらしいのだ。基本的には10代後半には発現するらしい。だから、まだ属性が現れていない人は僕と同様に不明となっているはずだ。

僕は属性不明の生徒が集まる看板を探した。でもいったい何て書いてある看板なのだろう。僕がその様なことを考えながら校庭を歩いていると「????」と書かれた看板を発見した。

こっ、こおおおお、これは。かの有名なゲームの魔王系ではないか。間違いない。ここが、こここそが僕の居るべき場所だ。

「おい、天上。君は何一人で胸を張って今にも高笑いをしそうなポーズをしているんだい。無駄に幸せそうで無駄に気持ち悪いな」

僕がやっと見つけた僕の場所に喜びを感じていると幸野が声をかけてきた。

実習始まる（前書き）

凄く久しぶりの投稿です…。

実習始まる

「幸野先生がここの担当なんですか？」

「そうなんだよ。まったく落ちこぼれ達の世話係は疲れるな。まあ君みたいな生徒なら面白いことがありそうだけれど」

「落ちこぼれとは酷い言われようですね」

僕は周りを見回した。周りには僕以外にも10人くらいの人が居た。この10人はまだ属性が判明していない人たちである。

「あれ、みそぎじゃん！？何でここに居るんだよ？」

「……………」

みそぎは何も答えなかった。

「おいおい、お前は魔法使ってただろ。ここにくるのは魔法使えない僕とか、属性発現してなくて属性付与されてない魔法を操ることしかできない人だけだろ」

「違うよ。天上。彼女はここで正解だ」

「何ですか？」

「あれ？そうかそうか。なるほどね。君は教えてもらっていないわけか。まあ、それも悪いことじゃないし。ふむふむ。君は彼女の魔法を見たことがあるのかな？天上」

「あるからおかしいと言っているんじゃないですか」

「じゃあ、君は彼女が何属性の魔法を使っていたかわかるのかい？」

「そんなの、えーと…」

そういえば、あの魔法はどの属性に属しているのか僕にはわからない。

「だろ？そういうことだ」

何かイマイチ納得がいかないが、属性的には確かに？？？で合っているのかもしれない。でもどの属性にも属さない魔法っていったい…。

「さて、他のところは既に実習の説明を始めているようなので、ここも始めたいと思う。まず、ここにいる君達は属性が発言していないもの、もしくはどの属性にも属さない魔法を扱えるもののどちらかだ。この二つのパターンには大きな差があるため全てを合同で行うことは難しい。よって時には個々によって実習の内容が変わることがあるので理解しておいてもらいたい。また在学中に属性が発言したものはすぐに申告し、その属性の方へと移るように」

「あの、少し宜しいでしょうか？」

金色の髪をした女の子が幸野の説明が途切れたのと同時に口を開いた。

「ん？何だ質問か？」

「いいえ、質問ではありませんわ。わたくしがこのグループにいるのがおかしいと言ってますの。水と雷の二つの属性を操ることができるこのわたくしが何故この落ちこぼれの方々と一緒なんですか？」

一応、それも質問なのではないかと思うのは僕だけだろうか…。

「うん。しょっぱなから威勢がいいね。そんなに幸せなのかい？先程言ったように君の場合は後者だね。つまり、君はどの属性にも属さない魔法を扱うことができる。別メニューがあるから大丈夫さ」

「わかっていてわたくしをここに入れたのなら良いですわ。わたくしもこの方々と同様に落ちこぼれ扱いされるのは嫌だったものですから」

「おい！流石に他人を見下すようなその発言は良くないんじゃないか？」

僕は我慢できずに口を挟んだ。

「はい？あなた誰ですか？」

「僕はC組の天上瞬だ。お前こそ誰なんだよ？」

「わたくしのことを知らないんですの？知識のない方はこれだから困るわ。わたくし、この千秀学園の入学者でもめったに現れない魔力量300越えですよ」

「他人の魔力量なんか僕が知るかよ」

「ちょっと止めなさいよ。大人げない。彼女は私と同じA組の西京すみかさんよ」

みそぎが僕達の会話に割って入ってきた。

「あら、神代さん。その方はあなたのお知り合いかしら？」

「ええ、そうよ」

「おい、みそぎ。何で止めるんだよ？」

「もういいじゃない。今は一応だけれど授業中よ」

「そうでしたわね」

西京はそういうと僕らから離れた位置へと移動していった。

「うん。喧嘩もひと段落したようだから実習を始めようか」

幸野。お前は喧嘩が終わるのを待っていたのか？職務怠慢だ。

「まずは二つのグループに分かれてもらいたいと思う。名前を呼ぶから右と左に分かれてくれ」

幸野によって次々と名前が呼ばれていった。僕は右のグループだった。それにしても何故さらにグループ分けするのだろうか。

「瞬。同じグループみたいね」

僕の隣にはみそぎがいた。

「みたいだな」

「何？嬉しくないの？」

「い、いや。知り合いが居て凄くうれしい」

「ふーん、知り合いが居てか」

なんだなんだいきなり？ただ単に一緒のグループになっただけじゃないか。結局、同じ？？なんだからさらに分けたグループでも一緒だからってあんまり変わらないと思うのだけれど。

「あら、あなたと一緒にですの？くれぐれもわたくしの邪魔はしないようにして欲しいわね」

ああ、西京とも一緒か。この特徴的なしゃべり方と声で顔を見なくても判断できてしまう。

「さてこの4人のグループの担当の幸野だ」

結局、幸野が担当か。ん？でも4人つて？僕が横を確認してみるとみそぎと西京以外にももう一人女の子が居た。彼女は誰だろう？

「なあ、みそぎ。一番奥の女の子は誰か知ってる？」

「奥の子？私も知らないわ。西京さん・隣の方はどなたか知ってる？」

「私も知りませんわ。あなたお名前はなんていうんですの？」

何故か伝言ゲームのようになってしまった。ははは…。結果オーライ。

「なすの。静宮なすのって言います。B組です」

僕達も同様に自己紹介をした後、今日の実習の内容が明かされた。

「本日は互いに相手のことを知るといいうことも含めてあそこに作った土の壁へと攻撃を放ってもらう。では最初に西京」

「わかりましたわ。いきますわよ」

西京がそういうと最強の手のひらに半径10cmほどの水の玉が出来上がった。西京はその水の玉を壁の方へと打ちだした。壁に水の玉が当たる直前に雷が走ったと思ったら今度は土の壁が爆発した。

「すげー」

僕は感心してしまった。口だけではなかったようだ。幸野が作った土の壁をあつさりと破壊してしまうのはなかなか凄いことだと思う。水を電気分解して発生した水素により爆発したってところだろうか。

「じゅあ、次は静宮」

「は、はい」

静宮が位置に立つと既に新しい土の壁が作られていた。ちなみに

土の壁は幸野が風と水の属性を利用して作ったものだ。

「い、いきます」

静宮の手の平から炎が上がったかと思ったら、炎の色が赤色から青色へと変化していった。静宮は青い炎を土の壁へと放ち。土の壁はぼろぼろと砕けた。恐らく火を風の属性を利用してより強い青い炎へと変えたのだろう。このこも二つの属性もちか。

「次は神代」

「はい」

みそぎが土の壁へと手の平を向けた。すると衝撃波のようなものが土の壁を粉碎した。やはり属性がわからない。風に近い気もするけれど風を操っているという感じではない気がする。

「最後に天上」

「あ、僕？」

やばい。魔法の使えない僕はどうすればいいのだろうか…。

「あの幸野先生。僕は魔法が使えないのだけれど」

「あなた。属性の付与していない魔法すらも使えないの？落ちこぼれの領域を越えているわね」

西京の奴…。

「ただ単に土の壁を壊せば良いだけだから何でも良いからやってみる。普通なら殴っても壊せないだろうけれど」

なるほど。殴れってことか。それなら僕にだってできる。

僕は拳に気を集中させた。このくらいで良いだろう。僕は土の壁へと近づいて行き、そして土の壁を殴った。僕の拳が土の壁で止まった。

「魔法が使えないから殴るって馬鹿ばかしいわね。魔法でつくられた土の壁を素手で殴っただけなんかで破壊できるわけがないでしょ。手の方が砕けて終わりね」

西京は僕の拳が土の壁を破壊できなかったと思っていたのだろう。しかし、そんなことはない。僕は土の壁から拳を離れた。すると土の壁は音を立てて崩れた。まあこんなものだろう。

「何が起きたんですの？」

西京は目を大きく開けて驚いていた。みそぎも静宮もだっただけだ。

「さあ、これでお互いの実力がある程度はわかったと思う。今日の練習はここまでとする」

「あ、ありがとうございます」

皆、それぞれに挨拶をした。

「あ、そうだ。言い忘れていたけれど、次の練習は早速このメンバ

「で野外へ出てもらうから気合を入れておいてね」

そう言っただけで幸野は去って行った。もう野外実習かよ。流石に早いんじゃないか。僕は慣れているけれど他の子たちは違うだろうな。まあ、女の子だし。女の子？よく考えてみたらこのメンバーで男って僕一人じゃないか…。まさかこれは…。僕のハーレムじゃないかー！

野外実習 出発

「はい、皆集まっているね。それでは今回の野外実習の説明をしようかな」

僕達？？？のグループの4人は幸野によって集められた。

「先日行ったように君達には野外実習を行ってもらおう」

「先生、一つよろしいかしら」

西京が幸野の話を遮った。

「何だい？西京」

「どうしてわたくし達だけが野外実習なんですか？」

幸野は周りで通常の実習を行っている生徒達を見回した。

「ああ、なるほどなるほど。今日も元気が良いね、西京は。そんなに幸せなのかい？まあ理由なんてものは簡単なことさ。複雑な訳があるわけじゃない。君達には誰も指導ができないってだけさ」

「指導ができない？」

僕は西京と幸野の会話に口を挟んだ。

「だってそうだろ。君達の能力は特殊なものだ。単純に4つの属性のどれかを持っている者ならばその属性の熟練者に教われれば良い。」

単純計算で4つの属性の数が平等であるとしたら人類の4分の1がその属性の持ち主であるわけだから、指導者を探すのもたやすい。しかし、君達は違うだろ。僕も風と水の2つの属性を持っているわけだけれど誰かに教わるなんてことはできないんだよ。というわけで君達には自分で自分の力を磨いて欲しいという訳なんだよ」

「理解しましたわ。恐らく天上さんは理解できていないでしょうけれど、わたくしは理解しましたわ」

「いやいや、僕だってちゃんと理解くらいできてるから」

まったく西京はいちいち言うことがむかつくな。

「そうか、そうか。まあ一応、皆理解できたということで話を次に進めようか。では、まず君達にはギルドへと登録をしてもらう」

「ギルド？なあ、みそぎ。ギルドって何？」

「私に聞かないで」

「おいおい、ギルドも知らないのかい？天上。君は一体今まで何を学んできたんだい？」

「僕は習った覚えはないんですが。それに教えていたのはお前だ！」

「はあ、本当に知らないみたいね。どうしてわたくしがこんな無知な男と一緒にグループに属さなくてはいけないのかしら。しょうがないからわたくしが教えて差し上げますわ。感謝なさい。ギルドとは魔物の討伐といった依頼などの仲介を行うところですね。自分で対処できないことってあるでしょう？ギルドに依頼すればギルド

に登録した誰かが代わりに対処してくれるということよ。もちろんお金は支払わなくてはいけないのですけれどね。今回、わたくし達にギルドに登録しろということは依頼を受ける側になれということですね。こんなことも知らなくて良くこの千秀学園に入れましたね」

「いちいちうるさいな。ん？知らなかったのはみそぎも…んぐ」

急にみそぎに口を塞がれた。もちろん手で。決して口でなんていうおいしい状況じゃない。

「ばかつ。もういいじゃない」

顔を赤くしたみそぎが僕の耳元で言った。

まあ、良いのだけれど早く手を離して欲しい。呼吸困難に陥っている。この手を舐めてやろうか。

「でもおかしいわね。わたくしの記憶ではギルドへの登録は18歳以上でなくてはいけないということだったと思うのですが」

「はあ、はあ、お前の記憶違いじゃないのか」

ようやく解放された僕は息を整えながらここぞとばかりに発言した。

「いいや、確かに通常は18歳以上にならないとギルドへの登録はできないのが決まりだよ」

はあ、もう僕は発言するの止めようかな…。

「どうして？」

今までずっと黙っていた静宮が口を開いた。

「それはだね、この学園に所属するものは理事長の許可があれば年齢に関係なくギルドに登録できるんだよ。この学園は特別でね。言わなくてもだいたいは想像でわかるとは思っけれど、この学園の学費が凄く安いのはそう言ったことも理由にあるんだよね。だって生徒が依頼を受けられるんだから、そこからの収入もあるんだよね。それにこの学園の知名度はかなりのものだから、学生だからという理由で依頼を断る人も居ないんだよ」

「へえ、やっぱりこの学園で凄いんだな。でもちよつと待てよ。もしかして僕達が依頼をこなしても学園に収入が入るなら僕達ってただ働き？」

「天上。やはり君は面白いな。君くらいだよ。どうどうとそういう発言するのは。まあ安心していいよ。君達にも少しくらいの賞品は出るから。でも君達が依頼をこなすのは単位を取得するために必要なことなんだから、あまり文句は言わないで欲しいな。通常は登録もできないギルドに登録することができるんだし」

ふーん、まあ、大人の事情というか何というか…。

「ではではギルドに登録してもらっよ。知っているとは思っけれどSからEまであるランクの内、君達はEランクからだから」

僕達は用意されていた紙に個人情報などを事細かに記入し、登録を済ませた。

「じゃあ、早速何か依頼を受けようぜ」

僕はEランクの依頼を探した。ちなみに同ランク以下の依頼しか基本的には受けることはできないらしい。

「いや、もう決まっているよ。君達は勝手に依頼を受けることはできないんだ。通常ならば君達の年齢ではギルドに登録できないのだから、安全のことを考えてこちらの指定した依頼しか君達は受けられないようになってる」

まあ、確かに学園側にも色々と事情はあるだろうし、妥当な線だろうな。

「で、どんな依頼ですか？」

幸野が僕達に1枚の紙を渡した。その紙には野草の採取と書かれていた。都心部から少し北へ行ったあたりの森に生息している様々な野草を採ってきて欲しいとのことだ。現在、薬草などは自家栽培が可能ではあるが、自然界を生き抜いた野草、薬草の方が良く効くということ良くある依頼らしい。

「期限は3日だ。君達は通常の授業を3日免除されるように申請を出してある。よって3日間でこの依頼を完遂してもらいたい。都心から離れるので移動にも時間はかかるし、魔物も出るから気を付けて行くように。強い魔物が出ない地域だから大丈夫だとは思っけれど気を抜いてはいけないよ。ではいつてらっしやい」

「じゃあ、今日は準備ってことで明日の朝に出発しようぜ」

「わかりましたわ。神代さんと静宮さんもそれでいいですわね？」

「ええ」

「わかった」

「じゃあ、解散ですわね」

西京はそういうとすぐさま踵を返して教室へと戻ってしまった。

「私達も帰るわよ。瞬」

「了解。あつ！静宮さんも一緒に帰らない？明日以降の準備とか何を持っていけばいいかとか少し話したいし」

「わかった」

静宮さんは了承してくれたみたいだ。

僕達はいったん教室へと戻り荷物をまとめると帰宅した。教室に戻った時には既に西京の荷物はなかった。どんだけ早く帰りたいんだよっての。

「みそぎ。明日は何持っていく？」

「そうね。3日間分の食料と飲料と森だからサバイバルグッズとか必要かしら」

「まあ、食料は必須だよな」

「3日間分じゃ駄目」

静宮が珍しく自分から口を挟んだ。珍しくってまださほど話したことないから何が珍しいのかもわからないけれど。

「3日間分じゃ駄目ってどういうこと？」

みそぎが質問した。

「3日以上森に居る可能性もある」

「ああ、なるほど。確かに3日間って幸野が言っただけでちゃんと3日間で依頼をこなせるかわからないしな。森の中で食料が手に入るかもわからないし。多めに持って行った方が良さそうだな」

「じゃあ、買い物に行きましょう」

みそぎのその一言で僕達は買い物へと出かけることになった。

「食料って何を持っていけばいいんだろうな」

「そうね。あまり重いものは持ち運びには向かないわね。あとだいぶ熱くなってきたから、腐りそうなものも駄目ね」

「難しいな。あ、こんなのはどうだ？」

僕は固形のスティック状の食べ物をみそぎに手渡した。

「これなら良さそうね。大きさも手ごろだし、カロリー摂取にも良さそうだし」

「カロリー多いと太る」

静宮は女の子らしくカロリーとか気にするタイプらしい。みそぎは気にしないタイプであることは僕は経験則で知っている。

「駄目よ。森で一杯歩くんだからカロリーは取らないと」

「わかった」

結局、僕達はスティック状の食べ物とゼリー状の食べ物を主に買い込むことで落ち着いた。飲料は各自が水筒に入れて持って行くことにした。腐るのは嫌だから。あとは着替えや、タオルなどを持つていくということで問題ないだろう。ちなみに僕が男だということを理由にテントなどは僕が持つていくことに……。まあしょうがないか。

翌朝、僕達は駅で待ち合わせをしていた。僕はみそぎとお隣さんだから駅まで一緒に行った。遅い、遅いと愚痴を言われたが……。別に準備が遅かったわけじゃないけれど、みそぎは旅行気分のように何かと余裕を持って行動したがつたのだ。まあ、わるいことじゃないとは思うけれど余裕を持ちすぎて1時間前に待ち合わせについてしまうのはいかがと思う。みずさん曰く、好きな人と出かけるのは全てデートなのよ、だそうだ。みそぎは静宮や西京をもう好きな友達としてとらえているんだろうか。

ここで、今回の野外実習の予定を確認しておこう。まず1日目はほとんどが移動だ。都心部に居る際には電車が使える。都心から出ると歩くしかないから1日くらいで目的の森へと辿り着けるだろう。2日目は野草の採取だ。そして3日目で帰ると言ったところだろう。そう考えると1日目の朝と3日目の夜の分の食事は考える必要がな

いから三日分の食料を持っていても余るんじゃないかと思うのだけれど……。まあ、多い分には困らないから良いか。荷物が重くなければの但し書きが付くけれど。

僕とみそぎは適当に会話をして1時間を凌いだ。みそぎにとつてはその1時間もわくわくがとまらないといった感じで終始笑顔だったけれど。

「おまたせ」

静宮が到着した。背中にはリュックが背負われていた。昨日、それぞれが勝った食料や着替えといった物が入っているのだろつ。

「お待たせいたしましたわ」

続いて西京が到着した。僕は嫌そうな顔をした。

「天上さん。朝からそんな顔をするとう運気が逃げますわよ。わたくしはちゃんと時間通りに来ているのですからそんな顔をされるいわれはありません」

僕が嫌そうな顔をしたのには訳がある。決して時間がどうのといったことではない。

「僕がこんな顔をしているのは時間のせいじゃない」

「元からそういう顔でしたわね。失礼いたしましたわ」

「元からって別に否定はしないけれど、僕が目で表現していたのはお前の持っている荷物が原因だ！」

「荷物？」

西京は何がおかしいのかわからないといった感じで自分の背負っている荷物を見つめた。

「他の人と荷物の大きさを見比べてみる！明らかに他の人の2倍の大きさがあるぞ」

「そんなの備えあれば憂いなしっていうことじゃないかしら」

「そんなに何が入っているんだ？」

僕はため息をつきながら質問した。

「食料や着替えよ。まあ主には食料よ」

「僕みたいにテントを持ってきたとかっていうことは？」

「テント？テントはあなたの分担任と昨日、神代さんから連絡を頂きましたわ」

「じゃあいい」

ここまでの会話で大体の人というか皆分かっているかもしれないが、結構な距離を歩く予定なのだから大荷物なんか持っていたら、途中で力尽きてしまうのが落ちだ。僕はそのことについて言っていたのだが、西京は気づいていないらしい。もう、あとでどうなっても僕はしらん！

野外実習 1日目

「はあー。あとどのくらいで着くのかしら？」

「どのくらいってまだ1時間くらいしか歩いてないだろうが！」

西京が僕の予想通り早速、根を上げた発言を始めた。そんなにでかい荷物を持って来たからだろうが。

「もう歩けませんわ。休憩にいたしましょう」

「は？お前のペースに合わせてゆっくり歩いてたせいで今日中に着けるかも怪しいっていうのに休憩なんてできるか！」

「瞬。まあ、良いじゃない。休憩にしましょう。少くなら大丈夫よ」

「まあ、ちよつとくらいなら。テントを張るのにかかる時間も考えるよ。静宮。休憩だつてさ」

「わかった」

みそぎの説得によって僕達は木陰で少しだが休憩することにした。このペースで今日中に辿り着けるのだろうか。暗くなると魔物も活発化するから早く寝床を確保したいのだけれど。

「瞬。実際のところあとどのくらいで着きそうなの？」

「そうだな。さっきも言ったけれど、まだ1時間ほどこしか歩いてい

ないから、さっきのペースで歩くと5時間つてところじゃないか」

「5時間か。日が暮れてしまっわね」

「だから言っただろ。休憩している余裕はないって」

「じゃあ、ペースを上げた方がいいわね」

ペースを上げるか…。

みそぎとの会話の際にも思ったけれど、どうにかしてペースを上げなくてはいけないな。

僕は自分の荷物を重いものと軽いものに分けて袋に詰めた。

「そろそろ出発しましょうか」

「ああ、そうだな・静宮と西京も出発できそうか？」

「ええ、大丈夫ですわ」

西京は大丈夫と言ってはいるがまだ疲れが残った顔をしていた。

静宮は黙って頷いた。表情が読めないので疲れているのかどうかはわからなかった。

「ほら、西京。お前はこっちの荷物を持てよ」

僕は先程分けた軽いほうの荷物を西京に渡した。そして西京の荷物を奪い取り、僕は重いほうの荷物と西京の荷物の両方を持った。

「そんな。い、良いですね。あなたの助けなんて」

「うるせえー。黙って歩け」

マジで重いな……。これであと5時間くらい歩くのか……。しんどっ。

「瞬。大丈夫？」

先程から心配そうにこちらをうかがっていたみさぎが声を掛けてきた。

「み、みそぎ。話しかけないでくれ。集中しないと。た、倒れそうだ」

あの休憩以降、4時間ほど歩いているが一度も休憩をしていない。まあ、休憩が必要そうなのは僕だけだから僕が頑張って歩き続ければ休憩なしで行けるわけだ。みそぎと静宮の荷物は元からさほど重い荷物ではないし、西京も今は軽めの荷物を持っているだけだから。

ああ、ヤバい。足が上がりなくなってきた。乳酸が足に……。

「そ、そろそろ着いたんじゃない？ペースを上げて歩いてきたわけだし、日も暮れてきたし、ここらへんでテントを張りましょう」

「そうですね」

「了解」

みそぎの提案によってここでテントを張ることになった。平らなスペースがあり近くには川が流れていたので確かに丁度よいかもし

れない。

「わたくしもう歩けませんわ」

女性にはきつかったか。でも西京はだいぶ軽い荷物を持たせていたはずだから、他の人よりもだいぶ楽なはずだな。僕の方がしんどいって。僕は勢いに任せてその場に腰を降ろした。もう歩けない…。

「私達、薪を集めてくるわね」

みそぎと静宮は薪を拾いに茂みに入って行った。

「おい、僕達はテントを張るぞ」

僕は動かない身体に鞭を打って立ち上がった。

「うわっ」

何とか立ち上がった僕だが足を踏み出そうと片足を上げた瞬間にバランスを崩してしまった。片足では自分の体重すらも支えられないみたいだ。

「いいですね。わたくし一人でやりますわ。あ、あなたには借りがありますし」

「借り？」

「と、とにかくあなたは休んでいて下さい！」

西京は良く分からないけれど顔を真っ赤にして荷物がまとめておいてある方へと行ってしまった。怒っているのだろうか。まあいいや。少し休ませてもらうか。僕は木に寄りかかるようにして休むことにした。

「きゃー」

「ど、どうした？西京」

西京が僕の方へと逃げてきた。西京の後ろには…。オオカミ？つかいオオカミだな。全長5mくらいか、って僕も逃げないとヤバいかな。あ、身体が動かないんだった。

「おい、西京。いつもの威勢はどうした？そのくらいやつつけられるだろ」

「そ、そうでしたわね」

西京は向かいなおってオオカミの方へと手をかざした。西京の手から稲妻が走った。稲妻は見事にオオカミへと命中した。

「効いてなくね」

「そうですわね」

「怒らせちゃったんじゃないね」

「そうですわね」

西京の攻撃はオオカミの毛によって弾かれてしまった。そして、

攻撃されたオオカミは…。

「うわー。襲ってきた！いったい何したんだよ？」

「子犬と戯れていたんですの。そしたらいきなり」

「それ絶対あのオオカミの子供だろ！むやみやたらと森の中で動物に近寄るなよ！というかテントを張れ！」

「しょ、しょうがないじゃないですか？かわいかったんですもの」

「しょうがないって危なっ！」

オオカミの爪が西京に迫っていた。僕は咄嗟に動かない身体に鞭を打って飛び出した。

「痛っ」

僕の背中に激痛が走った。助けることに必死で背中に気を集中させることができなかった。

「いつてえなこのヤロー」

僕は拳に気を集中させ、力の限り殴った。

「あれ？」

僕の攻撃は直撃しなかった。膝をついた状態での攻撃であったことと、傷による痛みから掠るだけとなってしまった。しかし、オオカミにはこれだけで良かったようだ。野生の勘というやつなのだろ

うか、オオカミは逃げて行った。

安心した僕はうつ伏せで倒れた。出血量が少しひどいみたいだ。もう本当に動けないな。

「どうしたの？何か大きな声が聞こえたけれどって何をしているのかしら？瞬」

薪を探しに行っていたみそぎと静宮が西京の悲鳴を聞いて戻って来てくれたみたいだ。何故かみそぎの顔はお怒りモードだ。静宮は僕の方を変な人を見るかのような目で見ていた。僕は自分の今の状況を良く考えてみた。

現在、僕はうつ伏せになって倒れているはず？ん？…………。

僕が倒れこんでいたのは西京の上だった。西京を庇って攻撃を受けたのだから近くに西京がいるのにおかしなことはない。ただ、運悪く…。いや、運よく西京の上に倒れこんでしまったようだ。僕の体は少し横を向いていて背中のみそぎ達のほうからはみえていないらしかった。確かに柔らかい。

「瞬。遺言を聞いてあげる」

いや、何とも場に適した発言だろうか。背中に大怪我を負った僕が絶命する前に遺言を聞いてくれるらしい。ただし、死因は背中の傷による出血多量ではないだろうけれど。

「な、何をしているとかの問題じゃないですわ。天上さんが死んでしまいますわ。ど、どうしたらいいんですの？」

僕のもとへ救世主が現れた。まあ、もともと僕の下に居ただけ
れど。

「いや、死なないから。でも血は止めたいな」

「え？瞬。ひどい傷じゃない。早く応急処置しないと。誰か消毒と
包帯持つてない」

「持つてる」

静宮はこんなこともあるつかと救急箱ではないけど救急道具を準
備していたようだ。

「まず、服を脱がせるわよ」

「じ、自分でできるから」

「ほら、動かない！」

みそぎは僕に怒鳴りつけ、手早く応急処置をしてくれた。消毒が
傷に凄くしみて死にそうだった。

「で、何があつたの？」

西京が一部始終をみそぎと静宮に説明した。

「そ、そう。だからテントは手つかず状態で、あんな状態になつて
いたわけね」

僕はこんなにも背中に傷があつたことに喜びを感じたことはなか

った。もし背中に傷がなければ信じてもらえなかった可能性もなかっただろう。

みそぎと西京、静宮はテントを張り、夕飯の準備を始めた。僕は寝ていることを義務付けられた。魔法があるので、火を起こすのも簡単ではあるが、何もしないのは良心が痛んだ。背中の傷も徐々に回復しつつあるし。

「今日の夕飯はクリームシチューです」

静宮が僕にクリームシチューをよそってくれた。静宮は日頃から家事をしているらしく、みそぎと西京とは比べ物にならないくらい手際が良かった。というか調理はほとんど静宮がやっていた。みそぎと西京は早々と強制退場を言い渡されてしまったから。本当に役立たずだな。ちなみに材料は西京が持って来たものだ。クリームシチューがしてくれるほどの材料を持って来たためにあんなにも荷物が重かったのか。まあ今はこんなにおいしいものが食べられているので少し感謝する気持ちもないわけではない。

「さて寝ましようか」

その一言で僕は気づいてしまった。僕はどこで寝るのだろうか？選択肢は2つ。女性陣と一緒にテントの中。もしくは一人テントの外。僕は考えた。ここで自分からどこで寝た方が良いかを尋ねるべきか否か。もし僕が聞いた場合、間違はなく外で寝ろといわれるだろう。なぜならば、女性陣に考える時間が与えられてしまうから。聞かなかった場合はどうだろうか。寝る直前になって女性陣が気づき、テント外に追い出される。もしくはしょうがないとかなんとかで中で寝かせてもらえる。こんなところだろうか。眠る直前ならば頭は働かないし、可能性はある。というわけで僕の寝場所については自分

からは聞かないことに決めた。

さて、どう動く。既に食器の後片付けも済んで寝る直前だ。女性陣はテントの中へ入って行った。僕は何も言われなかった。どこで寝るとの命令は受けていない。それならば…。

僕は平静を装って、どうとテント内に侵入した。もう身体もだいぶ動かし、背中への傷はきれいさっぱり治っていた。もちろん背中に気を集中させ。細胞を活性化させていたからだ。普通はあれほどにえぐられた傷がこんなにも早くに治るわけがない。ただ、失った血はもどらないので貧血気味で少しふらふらする。

僕がテント内に進入した瞬間みそぎから言葉が発生された。

「瞬。あなたは外でしょ。何、ひっそりと侵入しているのよ」

僕に選択肢は用意されていなかったようだ。みそぎの機嫌はなおっていないかったらしい。僕は持ってきて来ていた薄い毛布にくるまり寝ることにした。

「瞬。あんた、最初の見張りだから寝ちゃ駄目よ。私達が調理している間に十分休んでいたから大丈夫でしょ」

調理中に与えられた寝ていろという命令がここにきて意味をなすとは思わなかった。一応、怪我人だったのに。

「天上さん。隣よろしいかしら」

僕が火を消さないように薪をくべていると後ろから声をかけられた。

「ああ、いいよ」

西京が僕の隣に座った。西京は何もしやべらない。何かいつにもましていじらしい。お嬢様っぽいキャラの西京がこんなだと凄くやりづらい。僕は何か話題をと必死に考えた。

「他の二人はもう寝たのか？」

「ええ」

「……………」

続かねえー。西京はどうして起きてきたんだ。考える。僕。

「あ、あの天上さん。さっきはありがとうございました。さ、さっきはって言うのはオオカミに襲われた時とか、荷物ももってくれた時とかのことですわ」

けっこう律儀な子なんだな。てっきりありがとも言えない子なんだと思っていた。

「いや、別に良いよ。怪我はこの通りだし。僕、傷の治り早いから。それよりも今後あんなことにならないように気を付けろよ。荷物ににおいてもオオカミにおいても」

僕は回復した背中を見せながら言った。

「反省していますわ」

「それなら問題ないよ。そう言えばオオカミにした攻撃だけど、全然力がこめられていなかったな」

「あの時は必死であまり集中できませんでしたから」

「もつと一点に集中するイメージで魔法をつった方がいいと思うぞ。持っている力は凄いいんだから」

「凄いだなんて恥ずかしいですね。今度からはそうします。今後モアドバイスをお願いしますわ」

「ああ」

何か西京の性格が変わってしまった気がする。前まではもつとツンツンしていたと思う。

「あ、あの」

物思いにふけていた僕に西京が話しかけてきた。

「何？」

「瞬さんとお呼びしてもよろしいですか？」

「え？ああ良いけど」

「では今度から瞬さんとお呼びしますわね。おやすみなさい」

そう言って西京はテントに戻って行った。暗がりでは良くは見えないけれど顔が少し赤くなっていた。やはり西京は変わってしまった

ようだ。

ん？そう言えば僕はいつまで見張りをすればいいんだ？次の見張り是谁だ？何も聞かされてはいなかった僕は間違って起こしてしまうのも悪いと思って誰かが起きてくるのを待っていたのだけれど、結局日が登るまで誰も起きては来なかった。

野外実習 2日目

「ふあー、良く寝たわ。あれ？もう起きてたの？早いわね。瞬」

みそぎがようやく目を覚ましたようでテントからでてきた。確かにまだ日が昇ってから間もない時間に起きているという状況は早起きというのかもしれない。しかし、僕はけっして早起きしたから現時刻に目覚めているわけではない。

「本気で言っているのか？みそぎ」

僕はあきれ顔で返答した。

「凄いくまね。どうしたの？」

「寝てないんだよ。誰が今の今まで見張りをしていたと思っているんだ！」

「ああ、そう言えば。何で起こさないのよ。起こしてくれたなら交代したのに」

「次が誰なのかわからなかったんだよ！起こすに起こせないだろ」

「誰でも良いわよ、そんなの。次が誰なのかなんて決めてなかったし」

「そうですか…。とにかく僕は寝る」

もう限界だった僕は文句を言うこともめんどくさくなり、布団に

くるまって寝ることにした。いつもなら1日くらい寝なくても大丈夫なのにやはり血が足りないせいだろうか。僕はすぐさま眠りに落ちた。

「…きて下さい」

「ん？」

何かの声を聞いた僕は重たい瞼を上げた。

「起きて下さい。瞬さん」

「ん？さ、西京？」

僕の目の前には西京の顔があった。

「西京。何でここに？」

「良く寝られましたか？朝ご飯ができましたので呼びに来たんですわ」

「ああ、なるほど。でも…。どうして僕は膝枕をされているわけ？」

「枕も無しに寝ていらっしやいましたので枕の代わりにと思いまして。お邪魔でしたか？」

そんな恥ずかしそうな顔で言われたら邪魔だなんて言えないって。

「いや、邪魔じゃないけど…」

こんなところを誰かに見られたりなんかしたら……。僕は目だけを動かして辺りをうかがった。

み、みそぎ？ちょうどその時、みそぎが茂みから現れた。

「西京さんが瞬を呼びに行ったきりなかなか戻って来ないから様子を見に来てみれば……。瞬！あんたは西京さんに何やらせてんのよ！」

「え？僕？僕がやらせたわけじゃ」

怒りを隠そうともしないみそぎの顔に怯えた僕は咄嗟に立ち上がり逃げ出した。まあ、結局のところは逃げ出しても意味はなかった。みそぎによって放たれた衝撃波によっておい茂っていた木もろとも僕はなぎ倒されたわけだから。植物たちには本当に申し訳ない。

「大丈夫？」

静宮が僕に声をかけてくれた。

「まあ、一応大丈夫」

「本当に神代さんはやりすぎですわ。瞬さんが怪我でもしたらどうするおつもりでしたの？」

「どうするって、にやけ面で膝枕なんかされている奴が悪いのよ」

「膝枕はわたくしが瞬さんのことを思っただけですわ」

「は？元はと言えばあんたが呼びに行ってから戻って来ないから悪いんでしょ。それに膝枕なんかして……」

「あら、羨ましいんですの?」

「羨ましくなんかいいわよ! あ、あんたこそ瞬さんだなんて変な呼び方していったいどうしたのかしら?」

「!!! しゅ、瞬さんがそう呼んで欲しいと言ったんですわ」

「え? 僕?」

「しゅ・ん」

みそぎの視線が西京から僕の方へと移った。すると突然、静宮が僕の持っていたお椀を奪った。ちなみに今は皆で朝食を食べていたわけで僕はお椀を持っていた。

「ぐはっ」

僕は再び吹っ飛ばされた。マジで痛い。僕が吹っ飛ばされることを予想しての静宮の行動はナイスファインプレーだった。僕が襲われる前に食器をあずかってくれたのだから。

「さあ、行くわよ。瞬。さっさと歩く」

そう言うともそぎはどんどん先に進んでいった。僕達はみそぎの後について行った。

「神代さんは本当に瞬さんには厳しいんですね。大丈夫ですか?」

僕が再度みそぎの攻撃を受けた後、僕達は何とか朝食を食べ終え

て出発の準備を始めた。僕はあいも変わらず重い荷物を持っている。昨日の夕食と今日の朝食によってある程度食料を消費したため多少は軽くなっただけだが、重いことには変わりなかった。そんな荷物を持った僕がのろのろと歩いていると未だに不機嫌なみそぎから罵声がとんでくるのだ。西京は昨日から僕に対して急に優しく接してくるようになり、万々歳なのだが、代わりにみそぎの機嫌が悪くなったのでプラスマイナスゼロ、いや少しマイナスといったところだった。

「ここらへんね。野草を集めましょう。みんな、これと同じものを集めるのよ」

みそぎのその一言で僕達は早速、野草の採取に取り掛かった。思った以上にたくさん生えていたため集めることに苦労はしなさそうだった。

僕はある程度採取が終わり、時間も結構たつたので、荷物をまとめて置いてあった場所に戻ってくると西京と静宮が既に戻ってきていた。

「あれ？みそぎは？」

「こちらにはいませんでしたわ」

「こっちにもいない」

西京と静宮はそれぞれが採取を行っていた方向を指し示した。ということはあつちか。

「じゃあ、僕はみそぎを探してくるよ。昼食の準備でもしててもら

える？」

「わかりましたわ」

「わかった」

僕は西京と静宮に昼食の準備を任せ、みそぎを探しに向かった。

「ん？」

僕が木々をかき分け、進んでいくと木々の生えていない広い場所に出た。そこにはみそぎがいた。ただし、みそぎが二人。

「「瞬」」

二人のみそぎが同時に僕の名前を呼んだ。

「みそぎ？何で二人？」

「「こいつが私の姿をして急に茂みから現れたのよ」」

二人のみそぎが同時にお互いを指差した。

「つまり、片方は偽物ってこと？それでいて魔物？」

「「そうよ。こいつが偽物よ。本物の私を間違えるわけないわよね」」

再び、お互いがお互いを指差した。僕にどうやって判断しろと…。

その時、突風が吹いた。

「危ない！」

僕から見て右側にいるみそぎの頭上から、腐っていたために突風によつて折れたのか枝が落ちてきた。僕は咄嗟に駆け寄り、みそぎを抱えて枝を避けた。

「大丈夫か？」

少し地面に転がるようになってしまったためにみそぎの服が少し乱れていた。お腹が見える。僕の顔が少し火照った。

「ちよつと何してるのよ！」

左側にいたみそぎが僕に詰め寄ってきた。僕は助けたみそぎから離れ、詰め寄ってきたみそぎからも距離をとった。

「いや、助けたただけだから。な、何も」

僕は両手を挙げて何もしていないことをアピールした。

「ふーん。助けたふりして触ったりしてたんじゃないでしょうね？」

みそぎは納得のいい顔をしていた。

「何もしてないって！そ、それよりも、戻るぞ。みそぎ」

僕は詰め寄ってきた方のみそぎの手をとり、歩き出した。

「ちょっと待ちなさいよ」

枝から助けた方のみそぎが僕を呼びとめた。僕が手をとった方のみそぎは僕の突然の行動にぼかんとしていた。

「僕がみそぎを見間違えるはずがないだろ。お前はみそぎじゃない」

僕はそう言うとそのまみそぎを引っ張って歩き出した。

「どうしてわかったのかしら。外見は完全にコピーしたはずなのに」

僕達の後ろから突然に異様な殺気が放たれた。

「見える部分だけはな」

僕は本当ならば争いたくなかったが、敵が殺気を放ってくるいじょうしょうがないと思い、後ろを振り向いた。振り向いた先にはみそぎの姿はなく、僕の姿があった。

「瞬が二人？どちらが本物なの」

我に返ったみそぎがふざけたことを言いやがった。

「お前、この状況でそれを言うか？ボケはいらないって」

「冗談よ。わかってるわよ、そんなこと。手をつないでいる瞬が本物だってことくらいわかって…。手をつないで…」

視線をつないでいる手へと向けたみそぎはヤカンを沸騰させた時のように頭から湯気を登らせながら顔を赤くした。

「おい、どうしたんだよ。みそぎ」

僕は咄嗟につないでいた手をはなしたて、みそぎの方へと身体を向けた。

「あ！」

みそぎがかすかに声を上げた。

「おい、いったいどうしたんだよ？」

「な、何でもない」

みそぎは顔を赤くしたまま下を向いてしまった。まったくもってわけがわからん。僕は考えることを止め、僕の姿をした敵へと身体を向けた。

「もう、話は済んだのかい？ 済んだようだね。じゃあ始めようか。ばれてしまったからには君達を生かしておくわけにはいかないんだよ。せっかくみそぎって子に化けて君達を喰らってやろうと思っていたのに」

「それは残念だったな」

僕は高速で移動し、偽の僕の後ろに立った。

「それでもまだやるか？ 僕の姿をしたもの殴りたくないから、これでひいてくれたら嬉しいのだけれど」

「それは聞けない相談だね」

敵のその声を聞いた瞬間に敵が僕の視界から消えた。

「後ろだよ、後ろ」

「何？」

僕は前へと飛び、後ろを振り返った。確かにそこには僕の姿をした敵がいた。

「君の身体って凄いな。こんなにも高速で動けるなんて驚きだよ」

「どういうことだ？僕の脚力もコピーできるのか？」

「僕はね、一度見たものは全てコピーできるんだよ。トッペルゲンガー。それが僕の名前だよ」

「聞いたことがある。外見以外もコピーできることは知らなかった」

僕とトッペルゲンガーは同じスピード同じ腕力で攻撃と防御を繰り返した。

「みそぎ。手を出さないでくれ」

後ろの方で攻撃を仕掛けようとみそぎが構えていることに気付いた僕はみそぎにそう言って手を出させないようにした。

「賢明な判断だ。彼女が攻撃すればまた僕にその技をコピーされてしまうからね」

「まあ、そういうことだ。でもそれだけじゃない。みそぎが攻撃する必要なんでないんだよ」

僕は拳に気を集中した。そしてトッペルゲンガーへと殴りかかった。トッペルゲンガーは先程と同様に腕で僕の攻撃をガードした。

「うー！うわっ！腕が」

ガードに使用したトッペルゲンガーの左腕が僕の攻撃によって折れた。

「はあ、はあ。まだ本気じゃなかったんだ。油断しちゃったよ。でも一度見たからね。僕も同じ腕力で攻撃させてもらっよ」

そう言つとトッペルゲンガーは折れていない右腕で僕へと殴りかかった。僕はそれを左腕でガードした。もちろん左腕に気を集中させて。

「な、何？なぜお前の腕は僕の腕みたいに折れないんだ？」

「まあ、ちよつと訳ありでね」

そう言つと僕は気を集中させた拳でトッペルゲンガーに連打を浴びせた。トッペルゲンガーは身体を支えるだけの力も残っていないのか、その場に倒れた。するとトッペルゲンガーがボンッと音をたてて消えたかと思うとそこには直径10cmほどの鏡が現れた。

「どついうことだ？」

「うわー。きれい。私が映ってる。それに軽い」

みそぎが鏡を見つけるとすぐさま手に取ってしまった。

「おい、危なくないのか？」

「え？全然平気よ。それにしても凄いわね」

「凄いつてただの鏡だろ」

「鏡？鏡にしては軽いわよ」

ああ、そういえばこの世界にはガラスがなかった。この世界での鏡は単に鉄を磨いたものだっし。前いた世界での鏡は確か銀メッキの上にガラスコーティングされたものだから軽いけれど、この世界での鏡は普通に重かったな。それにだんだんと錆びてくるし。

「まあ、特注品の鏡じゃないか。僕はいらないしそれはお前にやるよ」

「本当に？やったあ」

みそぎは嬉しそうに鏡をのぞきこんでいる。危険性も無いみたいだし、まあいいか。一応、戻ったら幸野に聞いてみるか。

「瞬？」

「ん？何？」

「そういえばどうして私とトッペルゲンガーを見分けられたの？そ

れにどうして瞬の攻撃はトッペルゲンガーに効いてトッペルゲンガーの攻撃は瞬には効かなかったの？」

「げっ！攻撃については何と答えるべきか…。攻撃と防御を繰り返している際に気を使用していてもトッペルゲンガーの方に変化がなかったから、見えるものしか真似できないという推測をしたわけだけれど。あ！」

「えーと、攻撃については…。僕って強化みたいなもの使えるから。前の実習で僕は殴っただけで土の壁を壊せただろ」

「ああ、そういえば」

「トッペルゲンガーって見たものは真似できるけど見えない僕の強化は真似できなかったんじゃないのかな」

「ふーん。瞬って変な力を持っているのね。それで見分けられたのはなぜ？」

「トッペルゲンガーのお腹には傷がなかったからわかったって言うてもいいのだけれど、10歳のころに崖から落ちてきたお腹の傷がみそぎのコンプレックスだったら不味いしな。」

「えーと、何となくだよ。お前だって言ったじゃん。僕が間違えるわけないって」

僕がそういうとみそぎはまた顔を赤くした。

野外実習 終わり

僕とみそぎは西京と静宮の居る場所まで戻ってきた。

「おつ。飯だ。飯だ」

「さきほど昼食ができたところですわ。遅かったのでわたくし達も探しに行こうかと考えていたところですわ」

「まあいろいろと手間取ってね」

「手間取ってって…。まさか!」

西京がみそぎの方へと顔を向けた。

「な、何もしてないわよ」

西京とみそぎが何の話をしているのかは僕にはわからなかった。それよりも飯だ。飯。僕は静宮のもとへと向かいお椀によそってもらった。うーん、上手い。

「静宮はやはり料理が上手いんだな。将来良い奥さんになれるんじゃないね」

「「はっ?!」」

「し、知ってる」

みそぎと西京がいきなり大声を出したのにも驚いたが、静宮の返

答にも驚いた。上手いことは知ってるって意味か？もうちょっと照れたような返事をしてくれることを期待していたのに。まあ、照れてはいたけど。

午後も同様に野草の採取を行った。午後は変な魔物に出くわすことなくスムーズに採取がおこなわれた。このくらい集めれば文句はないだろう。という訳で…。

「飯にしようぜ。夕飯。夕飯」

僕は今度はどんなおいしい料理を静宮がふるまってくれるのか楽しみでしかたなかった。みずさんの料理も美味しいけれど別の人の味付けは新鮮味があつていいものだ。僕は夕飯の催促を始めるとみそぎと西京の目が獲物を見つけたかのように光った気がした。ちよつと怖い。

「もうそんな時間なのね。しょうがない。今回は私が作ってあげるわ」

「いいえ。神代さん。瞬さんから聞きましたけれど、お昼前に魔物と出会ったんですってね。疲れているでしょうから、わたくしが作りますわ」

二人とも何かを狙っていたかのように僕の発言に対して瞬時に反応した。みそぎも西京も採取の方はあまりはかどっていなかったというか、何か考え事をしていたようで手につかないといった具合であつたけれど、いったいどうしたのだろう。

「いつも通りわたしがやる」

「「いいえ。静宮さんは休んでいて」」

静宮は強制退場させられた。いつも任せてしまつて申し訳ないからとか色々理由は言っていたみたいだけれど、それだけじゃない気がしてならない。そう思わせるだけの迫力が二人にはあつた。

「いいじゃん。静宮。こっちで話してもしながら待つてようぜ」

「わかつた」

静宮はしょんぼり顔でやつてきた。本当は料理をしたかつたのだろつ。

「静宮つて一人っ子？」

「どうして？」

「いや、何となく。そんな気がしたから聞いてみただけ」

「そう。だからこういつにぎやかなのも新鮮でいい」

「まあ、新鮮か」

「食べちゃいたいくらい」

「いやいや、静宮。新鮮なのは雰囲気であつて食べ物じゃないから……」

「そう。残念」

おいおい。僕の想定していたタイプと違うぞ。静宮っておしとかで普通な感じだと思っていたのに。想定範囲外だぜ。まったく。

「天上は神代とどういう関係？最初から仲良さそうに見えた」

「まあ、旧知だからな」

「窮地に陥った関係？」

「別に窮地に陥ってねえよ。てかその窮地じゃないから。旧式とかの旧に知識の知で旧知。古くからの知り合いって意味」

「ふふふ。知ってる」

知ってるなら言うな。そして笑うな。無駄に説明してしまった僕の方が恥ずかしいじゃないか。やはり掴み所がないというか何と言うか…。

「掴みどころならある。胸とかお尻とか」

「それは…」

僕は視線を静宮の胸やお尻へと向けた。って違う。

「胸とか尻じゃなくなたって身体はだいたい掴めるわ！ってそれも違う！って僕声に出してた？」

「ふふふ。出してない。そんな気がしただけ」

静宮をつかがうように見すぎていたか？気を付けないと。

その後もみそぎと西京が呼びに来るまでこんな変なやり取りが続いた。今日のこの出来事によって僕の中での静宮のイメージはだいぶ違うものへと変わってしまった。今のところ僕の中ではボケ大好き少女といった感じた。

「どうぞ。召し上がれ」

みそぎが胸を張って僕に夕飯を渡してくれた。果たしてこれは料理と呼べるのだろうか？こいつはとにかく焼けばいいとでも考えているのではないかと考えてしまうような料理だった。

「瞬さん。こちらをどうぞ」

西京も僕に夕飯と思わしきものを渡してくれた。こちらは何と云うかこりすぎておかしくなったという感じだった。間違いなく入れすぎ。良いところをすべて取ろうとして台無しになってしまっている。

僕は意を決してみそぎの料理に手を付けた。がりつと音がしたかと思うと僕の歯がってことはないけれど、料理が砕けた。というか炭となってどこかへ飛んでいってしまった。

「これじゃあ食べれないな」

「そうね」

みそぎはしょんぼりとしながらテントへと入って行ってしまった。

次に僕は西京の夕飯へと手を付けた。みそぎのよりも酷い。まだ

みそぎの料理は焼いただけということで味は焦げの味だろうと想像ができたが、こっちは無理だ。

僕が料理を口に運ぶと何かが飛んで行った。みそぎの時は炭が飛んで行ったが今度は何かが飛んだのだろう…。

僕は朝になって静宮に起こされた。今の状況を口で表すなら僕はあの言葉を言ってみたい。ここはどこ？私は誰？と。

僕は西京の料理を口に入れた瞬間に倒れたらしい。飛んでいったのは僕の意識だった。西京はそれを料理が上手すぎて僕がすぐに寝入ってしまったのだと勘違いしたらしい。そしてなぜか、みそぎも西京も一人分しか料理を作っていなかったらしい。まるで僕一人を殺すために仕組んだ巧妙な罠のようだ。静宮はというと前もって用意してあった固形の食料やらゼリーやらを夕飯にしたらしい。はは、なんて羨ましい。

こうして3日目の朝を迎えた僕達は僕がどうしても言って静宮に作ってもらった朝食を食べて自分達の住む街を目指した。

「みそぎ。あの料理はないだろ。野菜まで炭化してたぞ。まだ生で出してくれた方が良かった」

「生じゃ料理って言わないじゃない」

「いいや。サラダは生だけどれつきとした料理じゃないか！生を馬鹿にしちゃいけないぞ。生の方が気持ち…。な、生の方がいいことだってある」

「ん？まあ、そうね。次からは気を付けるわ」

ふうー。危ない。危ない。僕が危ない人になってしまつところだつた。

「それで感想は？」

「は？感想？あれで感想をもらえと思つてゐるのか？百年早い」

というか既に感想は言つたつもりだったのだけれど。みそぎの中では批判の類は感想と認められていないのだろうか。

「私、百年も生きられないから」

「いや、真面目に受け止められても……。と、とにかく感想が欲しかつたらみずさん並とはいかなくても、あれくらいまともになつてから言え」

「ちえ」

ちえっじゃない。焦げは食べ過ぎると癌になると言われているんだぞ。僕の身の危険も考えてくれ。みそぎはそう言つと前で歩いている静宮の方へと行つてしまった。

「瞬さん」

今度は西京が現れた。まあ現れたつて言つても最初から近くには居ただけだ。

「どうした？西京」

「そういえば昨日の料理の感想を聞いてないと思ひまして。正直に言つて下さい。覚悟はできていますわ。良いお嫁さんになれるとか僕のためにずっと作つてくれとか…」

何か西京がトリップし始めているが僕は気にしないことにした。

「感想かあ…。正直に言つていいんだな？」

「はい。正直に」

現実に戻つてきた西京が返事をした。良し、正直に言おう。

「あれは料理じゃない！」

僕は断言した。

「……………」

西京は返答もしない。ちよつと強く言いすぎたか…。やはりもう少し濁した言い方をした方が良かったかな。

「えーと。西京。料理じゃないつて言うのは…」

「やりましたわ！初めての料理で料理の域を越えたと言われてしまふなんて。わたくしつて。ふふふ」

「いや、越えたなんて僕は一言も…」

僕の声は西京の耳には全くもつて届いてはくれなかった。どんだけプラス思考なんだ。しかし、僕もここで引き下がるわけにはいか

なかった。

「西京！聞いてくれ！」

「なんですか？」

そんなキラキラした瞳で僕を見ないでくれ。今から言おうと思っていたことが言えなくなるじゃないか。しかし、西京の後学のためにも僕は伝えなくてはならないことがあるんだ。

「あれは料理の域に達してすら……。じゃなくてもういいや！料理はちゃんと人に教わった方が良いと思うぞ」

「そうですね。今以上に発展するためには他人に教えを請う方が良いかもしれませんわ」

僕は負けてしまった。何につてそれは……。僕は良心の呵責に打ち勝つことができなかった。僕は弱い人間だった。まあ人に聞くようには伝えたから悪い方向にはいかないだろうと思うことで僕は落ち着いた。

そんなこんなで僕達は都心へと帰ってきた。もう夜遅い時間だ。さっさと帰って寝よう。僕は西京と静宮に僕とみそぎは同じ方向だからと言って別れた。西京がみそぎを睨みつけていたように感じたけれど気にしない。

「はあ、疲れた。ん？ああ、あの時の鏡か」

みそぎが何かをのぞきこんでいると思ったら鏡だった。

「瞬からもらった初めてのプレゼントだから。ま、まあ一応大切に
するわね」

「一応ね…」

本当にこいつは素直じゃない。嬉しいならうれしいと言えば良い
のに。

「そうだ。私、料理の特訓するわ。だから試食お願いね」

「え？」

「何よ？」

「何でもない…」

こうして僕達は家へと帰って行った。何が彼女の料理に対しての
意識を変えてしまったのか、僕にはわからない。それよりもとにかく…。
はあ、憂鬱だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5042q/>

気の利かない物語

2011年9月26日00時32分発行